FAST FOR SPEED FREAKS #3 F-FACTORY

FAST FOR SPEED FREAKS

FUCK ON THE BEACH

MISERY

MUKEKA DI RATO

CRIPPLE BASTARDS?

AVULSION

HAEMORRHAGE

MISCONDUCT

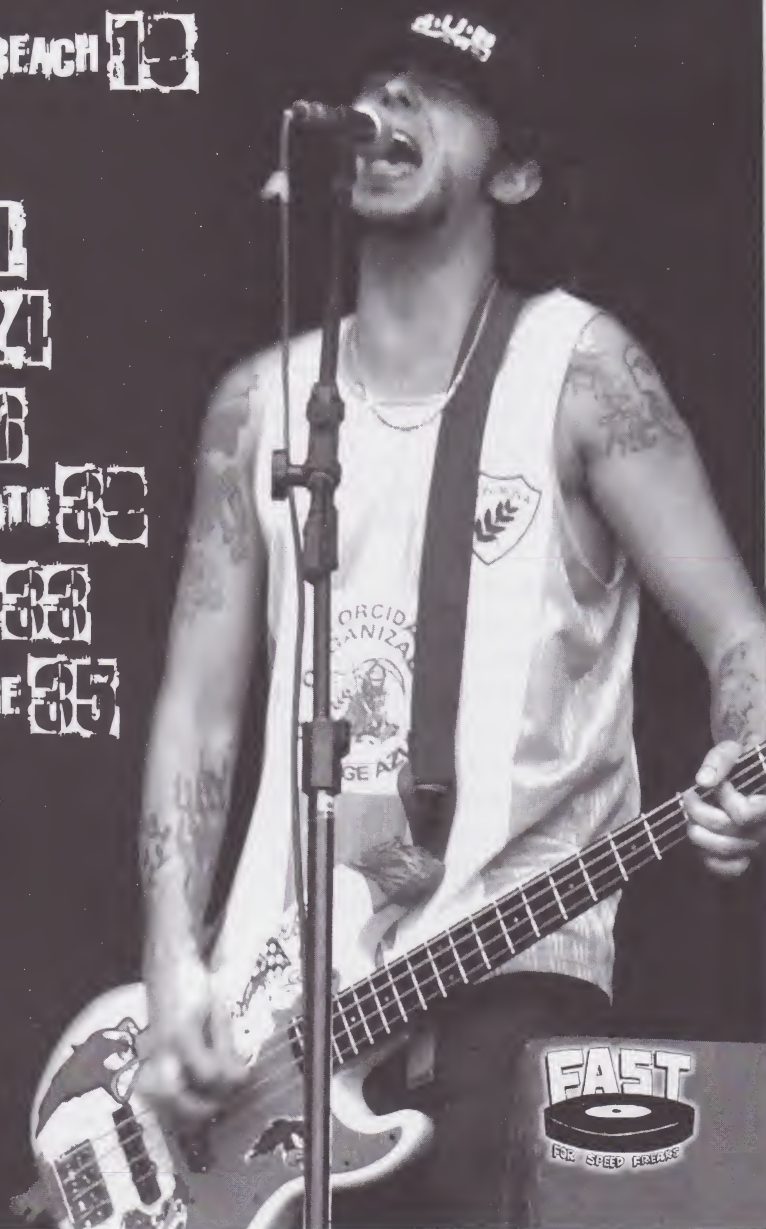
UNDERGROUND FAST HARDCORE MAGAZINE
ISSUE #3
350YEN

EDITOR
Efu Matsumoto

EDITORIAL DESIGN & DTP
F-FACTORY

F-FACTORY
2-31-7-103 Shimoyugi, Hachioji-shi,
192-0372 Tokyo, Japan

192-0372 東京都八王子市下柚木2-31-7-103
tel. 0426-70-6135 fax. 0426-70-6136 fast@f-factory.com
http://www.f-factory.com/

2nd press : March 1, 2003

Front cover photo : Fuck On The Beach
by Hiroko Matsushita

This page photo : Mukeka Di Rato

CONTENT

by Efu Matsumoto

誰もが気軽に利用できるようになったインターネットの普及によって世の中全体が情報社会となり、必要以上に溢れる情報の中から自分が"今"欲しい情報を簡単に入手することを可能にした。一々『広辞苑』や専門書等から時間をかけて限無く探し、ありつけたと思ったら大したことなかったりして、そんな手間が省けたので少なくとも時間にも余裕が出来たわけだ。時間という意味では、日々新しい情報が何処からか発信されることによって流行の移り変わりも非常に速くなり、他の興味の対象物に目を奪われたすきに、あっという間に状況が変わってしまうということはしょっちゅうある。ただ、その環境と状況は作為的に操作されていることもしばしばあり、中でもメディアの影響力は非常に大きく、特に現在の日本はその傾向にあると思う。

過去に何度も書いたけど本誌は、一般的に括られているジャンルを良い意味で無視したライヴを何度も体験し、その本来あるべき姿に共感したのが製作するきっかけとなった。また日本はもちろんのこと、海外で活動する格好良いバンドはたくさん存在するのだけれども、日本における知名度であったり評価があまりよろしくないようなバンドもいるのだ。全てではないにしろ、何だかんだ言ったってパンクやハードコアにしたって、既存のメディアによる影響は否定できず、素晴らしくても埋もれているバンドは数多いのだ。ただし上記のようなことからメディアに露出することを拒むバンドもいるけど、それはそれでバンド側の方針だから構わないし良いわけで、ここで言いたいのはバンドあってこそのメディアであることが重要なのだ。

では本誌はどうなのか。限られたメディアしか存在しない日本において、必要性を感じたからというのはもちろんのこと、自分が好きなバンドを何らかの形でバックアップしたいという気持ちによるところが大きい。個人レベルで製作しているので情報量の部分で他誌に比べ劣る部分はあるが、企業による利権が関わっていないので、本当の意味での好きなバンドばかりを掲載している。そのため現時点では広告を掲載していないけど、いろんな人が手にとって読んでみたいと思えるファンジンでありたいので、ある程度のクオリティーは保ちたいが、正直、全部数をさばいたとしても利益はほとんど無いに等しく、現状ではこのページ数が限界なのだ。また自分を含め本誌に関わっているスタッフは皆本業は別にあり、仕事の合間をぬって製作に携わっているので、2002年末に発行という当初予定していた期日を大きくオーバーしてしまったのも合わせてご了承願いたい。誤字脱字に関しても、何度も繰り返し確認しているのだが、結局減らなかった。一般誌では通常校正するスタッフがいるのだが、やはりそこも利益を生まないファンジンなので、その部分にお金や時間をかけるわけにはいかないのだ。今後、一応注意していこうと心掛けていますが…。

私個人的な考えであるが、現在の日本においてはファンジンなる存在が定着していないような気もするけど、80年代から90年代初頭までファンジンは数多く存在し、その影響力がどれほどまでのものであったか推測でしかないが、少なくとも私個人としては面白かったと思う。ライヴで表現された主張であったり、勢いがバンドの本質を知る上で重要な

POLICY

のはもちろんであるが、それらファンジンによってライヴでは体感できないバンド側の素の部分を味わうことができ、素直に面白いと思ったのだ。本誌を手にとってくれた人なら御存知と思うが、現在私の知る限りクラストコアを中心とした内容の『Crust War』、少々音楽的に違うかもしれないがスラッシュメタルを中心とした『Kabbala』がたいへん面白く、個人レベルで反商業的姿勢にも関わらず、クオリティー的には商業誌に劣らない出来なのだ。ただ本誌がシーンにどれだけ貢献できるかはわからないが、自分が読みたいと思うタイプのファンジンが存在することによって、少しでもシーンの活性化になればと思う次第です。

最後に本誌を製作する上で貴重なアドバイス、情報ネタを提供してくれた方、そして時間を割いてインタビューに応えてくれたバンドに対してこの場を借りて感謝したい。また次号は、日本のグラインドコアやブルータルなバンドを特集しようと思っています。ただし最初に書いたように、グラインドコアという括り自体アバウトだし、一概に一括りはできないので、本誌的に気になるグラインドコア系バンドを紹介したいというように理解していただきたい。

MISERY

最近表立った活動状況があまり伝わって来ていなかった感のあるMISERY。しかし、初期の音源を集めたディスコグラフィー盤のリリース、DISASSOCIATEやEXTINCTION OF MANKIND、THOUGHTCRIMEとのライヴを決行する等、実は結構バンドとしての動きはあるのだが、残念ながら日本への情報の少なさ故にそれ程話題にならなかっただけというのが現状ではないだろうか。
USクラストを代表する存在であり、ましてや音源自体素晴らしいのだから無視することはできないのは誰もが認めるところである。そして最近、イギリスを代表するといっても過言ではないEXTINCTION OF MANKINDとのスプリット盤が一部のレコード店で多く見かけるようになったのを機に、インタビューを試みることにした。やはりMISERYは最高なのだ!!!

INTERVIEW

──まず最初に、MISERYというバンド名の由来を教えてください。
Jon Misery：MISERYという名前は、世界中で起きている苦痛な出来事から得たんだ。

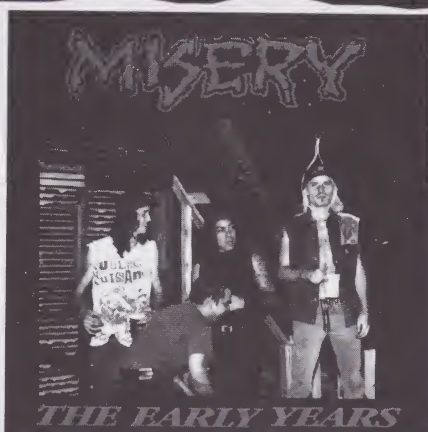
──MISERYの今までの経緯を教えてください。
Jon Misery：1987年、地元ミネアポリスでパンク・バンドをやりたくなって結成したんだ。最初のシンガーは元NAUSEAのメンバーで、1回東海岸をツアーしたね。その後、彼が脱退してSidが加入したんだけど、それ以来メンバーは代わっていないんだ。それから、イングランドのEXTINCTION OF MANKINDとヨーロッパやアメリカのほとんどをツアーしたんだけど、レコードを売るためなんかじゃない。俺達は死ぬまで自分達の訴えを言い続けるだろうな。

MISERY DISCOGRAPHY

Born...fed...slaughtered 7" (1989)
Blindead 7" (1989)
Born...fed...slaughtered 7" (UK version 1990)
Children of war 7" (1991)
Production thru destruction 12"/CD (1991)
MISERY/Hellspawn split 7" (1992)
MISERY/S.D.S. split 12" Japan (1992)
Live in NYC 7" (1993)
Who's the fool...the fool is silence 12"/CD (1995)
MISERY uncensored video (1995)
MISERY censored video (Japan version 1995)
MISERY/Assrash split 7" picture disc (1996)
Midnight 7" (1997)
MISERY/Extinction Of Mankind split 12"/CD (2001)
The early years CD (2001)

── 1997年以降、しばらくレコードのリリースがなかったですが、その間何をしてたんですか?
Jon Misery:たくさん酒を飲んで、新しい曲を作っていたんだ。俺達はそれぞれの時間も忙しいから、曲を作るのも遅いんだ(笑)。みんな歳をとってきたから、集まる時間を作るのも難しくなってきたんだよね。

── 現在のハードコア・シーンについて、何か感想はありますか?
Jon Misery:いろいろな所にハードコア・シーンはあるけど、俺はほんの少ししか見てきていない。大半のシーンがポピュラー・ミュージックばかりで俺達がプレイできるような所はないね。でもハードコア・シーンは少しづつではあると思うし、良い方向へ行っているんじゃないかな。新しいキッズは確実に増えてきているし。

with EXTINCTION OF MANKIND split 12"
(Sin Fronteras Records : PO BOX 8004 Minneapolis, MN 55408)

『The Early Years』12"
(Sin Fronteras Records : PO BOX 8004 Minneapolis, MN 55408)

── DISCHARGEの新しいCDは聴きましたか?
Jon Misery:いや、聴いていない。

── 現在のDISCHARGEについてどう思います? その新しいCDはSanctuaryというビッグなレコード会社からリリースされてますけど。
Jon Misery:俺は聴いていないけど、凄くイイって聞いたよ。それがヘヴィメタル・レーベルからリリースされていようが、俺としてはそれが悪いとは思わないけどね。そういったレーベルからリリースされたからって、誰かのハートを傷つけるのか?

── そうは思いませんけど…。
Jon Misery:つまり良い音楽であれば、どんな変な奴らでもシーンを良くしていくと思うんだよね。

『Born, Fed, Slaughtered』7"

『Blindead』7"

── あなた達はクラストコアだとか、ポリティカル・バンドとか言われるケースがあると思いますが、どう感じていますか？

Jon Misery:キミが言うクラストコアという言い方は、たしかに何かで括るとするならば俺達はそうとも言えるね。でも俺達としては、自分達の表現を自分達のスタイルとしてやっているだけだから、俺達の感覚で作られた音楽を他の人は真似することはできないはずなんだけどね。パンク・シーンにいる多くのバンドは、同じような格好をして、同じような音楽をやっているけど、俺達としてはそういうことはやりたくないね。

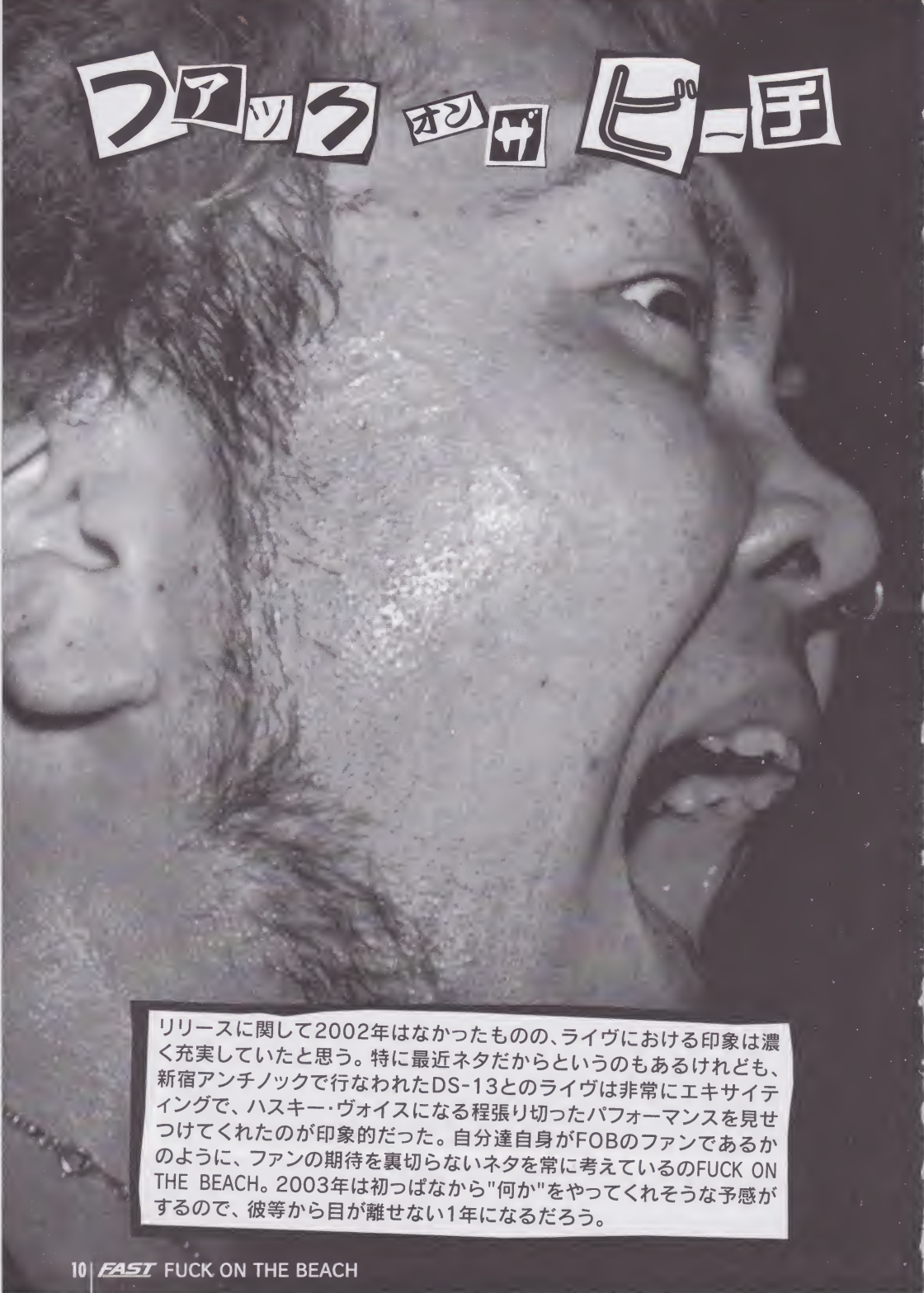
── MISERYのバンド名の由来についての質問でも触れましたが、あなた達の怒りの矛先は?
Jon Misery:毎朝、目覚まし時計が鳴って起こされた時に怒りを感じるね(笑)。あとは、ブッシュがまた戦争を始めようとしていることに怒りを感じているし、クソ宗教のせいで世界中の無実の人々が殺されていくというのも頭に来る。この世界では、毎日どこかで多くの人間や動物達が、クソ野郎に殺されているんだ。

── ブッシュ大統領はまた戦争を始めそうですけど、昨年の9.11以降あなた自身影響はありましたか?
Jon Misery:無くはないけど、でも日常的にムカつく事があるからね。一般的には、多くのアメリカ人が家に閉じこもってニュース番組を見て、フリークアウトしたね。

── いずれにしても、アメリカはまたイラクへ攻撃するでしょうね。
Jon Misery:俺としては、そうならないことを祈っているよ。人を殺す理由なんてないんだから。

── ハードコアはそういった怒りを表現した音楽なんですよね。
Jon Misery:もちろんだよ。ハードコア・パンクはそれが重要なんだ。

『Children of War』7"

with HELL SPAWN split 7"

── では最後の質問ですが、日本についての感想を。
Jon Misery:スシ(笑)。日本には本当に素晴らしいバンドや人がいるよね。世界でも有数なんじゃないかな。GAUZEやHELLCHILDとはミネアポリスで一緒にプレイしたこともあるんだけど、みんなグレイトな人達ばかりだったね。あと俺達はMCRからSDSとスプリット盤を出したこともあるんだ。でもまたいつかやりたいね。

※今回使用した写真はEXTINCTION OF MANKIND、DISASSOCIATE、THOUGHTCRIMEとのライヴ時のものです。

MISERY contact / 3023 Garfield Ave. S, Minneapolis, MN 55048 USA

ファック オン ザ ビーチ

リリースに関して2002年はなかったものの、ライヴにおける印象は濃く充実していたと思う。特に最近ネタだからというのもあるけれども、新宿アンチノックで行なわれたDS-13とのライヴは非常にエキサイティングで、ハスキー・ヴォイスになる程張り切ったパフォーマンスを見せつけてくれたのが印象的だった。自分達自身がFOBのファンであるかのように、ファンの期待を裏切らないネタを常に考えているのFUCK ON THE BEACH。2003年は初っぱなから"何か"をやってくれそうな予感がするので、彼等から目が離せない1年になるだろう。

INTERVIEW

── 以前『DOLL』誌（NO.138に掲載）でFUCK ON THE BEACHとして影響を受けたのは初期SxOxBやGAI、THE SWANKYSみたいな昔の日本のハードコアと答えていましたが、その辺は今も変わりはないですか?
ツヨッシー：そうだね。『Great Punk Hits』っていうのがあって、そういうのを友達からテープにダミングしてもらったりして。それを聴きまくって、うぉぉぉコレだぁ〜、俺コレだぁぁぁ!!!! みたいな感じで（笑）。

── それが高校生くらい?
ツヨッシー：いや、中2。それまでは聖飢魔IIとかを聴いてたんだ（笑）。あとはデュランデュランとかさ。

── ちょうど僕等の歳でいうと、その頃ってBOOWYとかも流行ってましたよね（笑）。
ツヨッシー：だからBOOWYでもそうだけど、どこかその前にパンク、ロンドン・パンクのイメージっがあって、そういうの聴いてると俺ってパンクじゃん、みたいな。とにかくパンクには何か通ずるものがあったんだよね。

── あとはカルチャークラブとか（笑）。
ツヨッシー：そうそう（笑）。中学の時って洋楽を聴き始める時期でもあって。シンディーローパーとかさ。でも俺はビビビッとくるものがなかったけどね。その時に『Great Punk Hits』みたいなのが友達同士のテープ交換で俺のところに回ってきて、うわぁッコレ凄ぇ〜って。あとブルーハーツとか、ケンヂ。ケンヂはメジャーに行くか行かないかって時期だったと思うんだけどね。あとはGASTUNKとかね。でその後、高校

に入ってすぐバンドを始めたんだよ。

── その時のメンバーは?
ツヨッシー：俺がベースで、ドラムがスケ、サンシロウはヴォーカルだったかな。あとギターがいたんだけどね。でSTAR CLUBとかやったりして。

── 今のFUCK ON THE BEACHのイメージからすると意外っすね（笑）。
ツヨッシー：そうそう、その時の俺等って革ジャン着てモヒカンだったりしたから、まぁそういうのが気に入られて、STAR CLUBのオフィシャル・ビデオとかに出演したりしたんだ。We are STAR CLUB、みたいなこと言って（笑）。

——いいっすねぇ(爆笑)。

ツヨッシー:で『Great Punk Hits』や『不法集会』、GAUZE、LIP CREAM、THE SWANKYSとか同時に聴き始めて。あとはSTALINとか。でそういうバンドのコピーとかを始めて。

——パンク·オンリーだったんですね。

ツヨッシー:そう、パンクしか知らないくらいだね。外国のバンドもだいぶ経ってから聴き始めたって感じなんだよね、GBHとかU.K.SUBSとか。でもやっぱり俺はTHE SWANKYSとかが好きだったからね。

——そう言われてみるとFUCK ON THE BEACHって、どこかノイジーな部分でTHE SWANKYSとかを感じるような気もしてきました。

ツヨッシー:CHAOS U.K.とかもその辺はもちろん聴いたけど、そのCHAOS U.K.に影響を受けたTHE SWANKYSの方が俺的には良かったんだよね。

——となるとCONFUSEやGAI辺りの九州ハードコアとかも?

ツヨッシー:そうだね、GAIとTHE SWANKYSに関してはレコード全部持ってるんだ。THE SWANKYSが東京に来たときはもちろん観に行ってたからね。SPACE INVADERSを始めるということも、ヴォーカルのWatchさんから直接聞いたりしたんだ。とにかくいろいろ話したよね、その時は。

——その頃はどんな格好してたんですか?

ツヨッシー:その頃初期パンクみたいなことやってたから、Watchさんみたいな風貌からジョン·ライドンみたいな感じに変わってきてたね(笑)。白いワイシャツ着て、ネクタイして(笑)。

——想像つかないっすね(笑)。

ツヨッシー:そうそう(笑)。でも今思えば、その頃の友達がNO THINKとかだったんだよね。まあその頃はジャンルなんて関係ないんで、とにかくカッコ良ければいいみたいなのもあって。で俺達はヒーローズってバンドやってて。デモテープ作ってね、今俺は持っていないんだけど。で俺ジョン·ライドンって名乗ってたんだ(笑)。

——でこの辺までが80年代って感じですかね。

ツヨッシー:そうだね、80年代後半。その後はサイコビリーが流行って。俺達もサイコ刈りしてね。91年頃まではサイコビリーとかばっかり聴いてたね。

——グラインドコアとか聴かなかったんですか?

ツヨッシー:NAPALM DEATHとかは聴いてた、パンク、ハードコアとしてね。あとギターポップみたいなのとかも当時流行ってたけど、グランジ以降の。あーいうのも全然いいと思えなかったしね。

——90年代初頭って何だか良くわからない時期だったと思うのですが。いろんなのが出てきて...。

ツヨッシー:そうそう、その頃になるとBEASTIE BOYSを良く聴いたね、『Licensed To Ill』を。あれってパンクじゃん。彼等が元々パンク/ハードコアの世界にいたってのは当時知らなかったけど、聴いたとき凄くパンクを感じたんだよね。Bボーイじゃないけど、音楽的にはヒップホップみたいなのは好きだったな。今のは全く分からないけど、あの頃のラップは面白かったね。

――音楽的にどんどんFUCK ON THE BEACHから離れてますけど(笑)。BEASTIE BOYSみたいなのから、どうやって今のスタイルに?
ツヨッシー:PUBLIC ENEMYとかのハードコア・ラップっていうのかな、あーいうものにハマっていって。ギャング・スタイルっていうのかなぁ。

――ONYXとか?
ツヨッシー:そうそう思い出した、『JUDGEMENT NIGHT』だ!!! あれは聴いたな。

――ONIXとBIOHAZARD、HOUSE OF PAINとHELMETとかコラボレーションした企画モノのやつですよね。
ツヨッシー:そう、いろんな昔のパンクのカヴァーとかしてたじゃん、あれって。ラップとかヒップホップを聴いてた時期で、パンクとかハードコアとか全く聴いてなかったのに、追っかけて聴いたものが、気が付いたらやっぱりハードコアだったんだよね。

――なるほど(笑)。
ツヨッシー:ANTHRAXとかもそういうのあったじゃん、PUBLIC ENEMYとかとさ。で、ビデオとか観るとモッシュとかしてて。STAR CLUBとかってステージ・ダイビングとかはあったけど、モッシュはなかったと思うんだよね。モッシュってなかったよね?

――サークル・モッシュみたいなのは日本でなかったんじゃないですかね、その頃は。
ツヨッシー:そうだよねぇ。あーいうモッシュとかさ、大きいモニタの上からダイ

ビングとかして、凄ぇカッコいいって。そういうのを観てビビビッとなると俺ってやっぱりパンクじゃん、みたいな。で、ちょうどその頃たしかSxOxBがメジャーデビューした時期だったんじゃないかな。

—— ちょっとデスメタルっぽくなった時期ですよね。
ツヨッシー:それに関してはビックリしたけど、スラッシュ／ハードコアの魂は薄れてないんだなぁって思ったよね。

—— もっともあの頃のデスメタルって、メタルよりもハードコア・シーンに近かったと思いますけどね。メタルからは完全に疎外されてたし。
ツヨッシー:そうだね、EARACHEとかね。でその頃ディスクユニオンがSxOxBを特集した冊子を出してて、その中のインタビューを読んでいたらBRUTAL TRUTHって格好イイって言ってたんだ。へぇ～BRUTAL TRUTHって格好イイんだって。で聴いたらやっぱり凄い。

—— TERRORIZERとか?
ツヨッシー:そうそう、NAPALM DEATHのメンバーが昔やってたっていうんで、聴いたりしたね。あとはOBITUARYとかさ。OBITUARYってデスメタルだよね?

—— そうですね。ただ今は別モノみたいになっちゃってるけど、あの頃ってデスメタルもグラインドコアもハードコアも一緒っていうか、同じ括りだったと思います。
ツヨッシー:そうそう、特に括りはなかったと思うね。デスメタルのコンピレーション盤を買っても良いバンドは2、3コあって、ダメなのはダメだったけど。でも全然覚えてないけど、何を買ったか(笑)。

—— 今後FUCK ON THE BEACHとして、どのような展開をしていこうと思いますか?
ツヨッシー:いろいろな表現はあると思うけど、自分でハードコアパンクだなぁと思うモノはやっていきたいねぇ。

—— 具体的に予定とかやりたい事ってあります?
ツヨッシー:2002年は企画とか音源発表はなかったけど、2003年は企画にレコーディングに能動的にがんばりますよ。何をやろうかなぁとか、何をやったら楽しめるかなぁとか、そんな事ばっかり考えているよ。あと、韓国ツアーとかも誘われてすげぇ興味あるし。海外のライヴはスゲェ楽しいしね。全然モテないけど(笑)。せっかくバンドやって自分を表現している訳だし、いろいろな人に見て感じてもらいたいよね。

—— 現在の音楽シーンについて何か思う事はありますか?
ツヨッシー:今ってお客さんとかにバンドの本気度っていうか、やる気っていうか、そういうのを伝えていると思うし、しっかり本気でやってないと先細りしていくと思うんだよね。もちろん生きていくために仕事もしなくてはいけないけど、常にバンドで何をやるかを考えているよ。で、ライヴの時とかに集中して表現するっていうか。お金もらっている訳だしフザけられないよね。

—— では最後に、このファンジンを読んでくれている読者へメッセージを。
ツヨッシー:2003年は面白い事をたくさんやりますよ～、期待して間違いないね!!!正月から飛ばしていきますから。2003年もFOBは超命がけで気合い入ってるもんで、よろしくぅ～。

Photo by Akiko Kawai

Contact : Tsuyoshi Ito
205 Yayoi-so 2-6-5, Fuchu-cho Fuchu-shi, Tokyo 183-0055 JAPAN

KING OF GRINDCORE FROM BRAZIL

グラインドコアと言えば、まず最初に頭に浮かぶのはNAPALM DEATHというのが自然かと思う。ただし現在において、グラインドコアなる音楽に相応しいバンドといえば間違いなく違うバンド名をあげる人も少なくないだろう。その中でも特に重要な位置付けをされているのはブラジルのROTである、という意見に対して誰も異論はないはずだ。基本姿勢と音楽性はあくまでもハードコア・パンクであり、これだけ長い間継続しているというバンドは他に例がなく、グラインドコアを象徴する存在になったと言っても過言ではない。にも関わらず、あまり雑誌等で取り上げられることの少なかったROT。そこで今回、私はROTに関する日本語訳をされたものを読んだことがなかったのでインタビューすることにした。グラインドコア・ファン必読!!!

INTERVIEW

――ROTの今日までどういったことをしていたかを教えて下さい。
Marcelo:俺がギターのMendigoと出会った時、彼はPERPETUOっていうバンドでプレイしていたんだけど、その後RIGIDITY CADAVERICっていうバンドも始めたんだ。でもそのバンドが解散してしまって、それで俺に新しいバンドを始めようってお声が掛かったというわけ。そういうわけで1990年にROTはスタートしたんだけど、ラインナップが決まらなくて、良い事だけじゃなく嫌な事もいっぱいあったね。でもたくさんギグをやって、たくさんレコードやテープをつくって。ある意味インターナショナルにね。結局オリジナル・ラインナップは俺とMendigoだけになってしまったんだけど、俺達としては新しいメンバーを入れてバンドを続けていきたいって気持ちがあったんだ。今までヨーロッパツアーを3度行なったんだけど、今年は俺達の友達であるWOJCZECHと一緒に8月から9月に行ったんだ。1ヶ月間、いろんな所でプレイしたんだよ!!!

――バンド名の由来は?
Marcelo:ROTっていう名前は最初のベースプレイヤーのアイデアで、俺達にコレはどうだ?って言ってきたんだ。俺達としては、どうしてこういう名前になったのかを知りたかったんだけど、彼曰く特別な意味は全くなかったんだ(笑)。短い名前で、俺達のサウンドに合ってるって思ったね。でも英語の辞書を調べて、ちゃんと意味を知っていたかったけどね。その後俺達の歌詞やアイデアと違って、"たわ言"って意味を込めてたってことが分ったんだけど、俺はこの名前が気に入っているんだ!

――ではどんなバンドにインスピレーションされましたか?
Marcelo:パンクからグラインドコア、ヘヴィメタル、いろんなバンドにだね!!! 例えば、TERVEET KADET、FEAR OF GOD、NAPALM DEATH、SORE THROAT、CRUDE SS、CELTIC FROST、AGATHOCLES、REPULSION、HERESY、RAPT、BRIGADA DO ODIO、CARCASS、DISORDER、ELECTRO HIPPIES、MACABRE、S.O.B.、CRYPTIC SLAUGHTER、SEVEN MINUTES OF NAUSEA、PATARENI、LAMA、ATACK EPILEPTICO、PSYCHIC POSSESSOR(1stLPのみ)、SLAUGHTER(カナダ)、XYSMA、NAUSEA、EXTREME NOISE TERROR、LARM、MORBID ANGEL、SOUND POLLUTION、FILTHY CHRISTIANS、FEAR OF WAR、HELLHOUSE等々書ききれないくらいだね!!! 俺達はこういったバンドをたくさん聴いて、素晴らしいアイデアを得ることができたんだ。

――歌詞は英語だけど、母国語は使わないの?
Marcelo:そうでね、でも数年後にはポルトガル語で歌おうって決めているんだ。でも俺としては、バンドを始めた頃のスタイルを特別な理由がない限り変えたくないんだ。だから今でも英語で歌っているんだよ。くだらない事かもしれないけどね。ポルトガル語の歌詞にして、それを聴いたり読んだりできる人が少数でも問題ないようであれば、英語に訳す必要はなくなるだろうね!!!

――現在のハードコア、グラインドコア・シーンについてどう思いますか?
Marcelo:今は良い感じだと思うけど、10年以上このシーンを見てきた俺としては、同じようなバンドばかりを扱うレーベルがたくさんあるね。俺はその善し悪しの区別はできるけど。REMAINS OF THE DAYは好きだし、KONTROVERZはライヴも最高に良いね! WOJCZECHも新しいバンドじゃないけど、彼等は本当にオリジナリテ

ィあるし、今一番チェックしなくちゃいけないバンドだね! LIFE IS A LIEも要チェックだね! あとはLYMPHATIC PHLEGMとか。

――ブラジルのハードコア・シーンはどうですか?
Marcelo:もちろん素晴らしいバンドはいっぱいいるよ! EXECRADORES、LIFE IS A LIE、DESECRATION、HATE CORROSION、LYMPHATIC PHLEGM、NOISE、TRAUMA ACUSTICO 、SPASMS、DISCHORD、CONTRASTE BIZARRO、STOMACHAL CORROSION、ANSIA DE VOMITO、VALA NEGRA、TAPASYA、NO PREJUDICE、DEATH SLAM、TERROR REVOLUCIONARIO、NEUROSE URBANAとかまだまだいっぱいいるよ! レーベルで言うならばRotthenness Records、Esperanza、2+2=5 Records、Shit Records、Bucho Discos、Lofty Storm Records、No Fashion HC Recordsとかね。ブラジル・シーンの問題は、バンドを盛り上げていこうというのが不足していると思うんだ。でも俺は続けていくよ!!!

――昔RATOS DE PORAOがメタルっぽくなった時、一部のパンクスに攻撃を受けたって聞いたことがあるんですが、それは本当だと思いますか? ROTは何かトラブルに巻き込まれたりとかはしてないですか?
Marcelo:それは違うと思うね!!! たしかに変わったと思うけど、俺達の場合は普段と違う客を前にしても問題ないし、仮に誰に攻撃されても全く気にかけないね!!!

――ところで、リリース枚数が多いですが、それらをリリースするレーベルを決める判断基準は何ですか?
Marcelo:まずは俺達が好きなレコードをリリースしているってこと。そして長い時間をかけて連絡を取り合うんだ。それによってある種の友情と結束が生まれるんだよね! 大きいレーベルだと、例えばRelapseなんかは良いことも聞いたことあるけど、悪いことも聞いたことあるんだ。それが本当のことなのかはわからないけどね。彼等もレーベルを始めた頃は当然小さいレーベルだったけど、大きくなるにつれて金儲けし始めたんだ。トレードが上手かったんだね、彼等は。俺達は正直に言って小さなレーベルで良かったと思っているよ。

――先程話に出た地元ブラジルのレーベルからディスコグラフィー的内容の『Old Dirty Grindcores』をリリースしましたが、そのことについて教えてください。
Marcelo:元々それは、今回リリースしたところじゃないレーベルから話のあったことで、俺達にディスコグラフィー盤を出したいって言ってきたんだ。でも1枚のCDにはまず収まりそうもないし、2枚組CDにしなくちゃ無理だってことだったので、俺達も慎重に考えたんだ。で結局そのアイデアは諦めて、今度はRhetoric Recordsに10周年記念CDはどうかって話たんだけど、Rhetoricはいくつか問題があってそれはできないって言われてしまったんだ。そういった経緯があって、俺の友達のDouglasとNelsonが運営しているレーベルから『Old Dirty Grindcores』をリリースすることになったんだ。内容は俺達の最初のスタジオ・レコーディングした1990年から去年まで。正直収録されている音源全てが素晴らしいクオリティじゃないけど、今までの経緯が分って素晴らしい内容になったなと思っているんだ。昔の音源を聴ける、ある種ドキュメントみたいだしね。グラインドコア・バンドで10年以上続けているというのはあまりいないし、そういう意味でも価値あるものかもね。

――ライヴに関してですが、あなた達はいろんな国のいろんなバンドと共演してますよね!!! そういった時、文化の違いを感じたりすることありますか?

PARA RAIO FESTIVAL

ROT (BRAZIL),

EXECRADORES (BRAZIL),
SEE YOU IN HELL (CZ), Y, FORCED TO DECAY, MINDFLAIR, ENTRAILS MASSACRE, THE MONOLITH, MAGGOT SHOES, INSTINCT OF SURVIVAL, BLINDSPOT A.D., PISSED YOUTH, AVERY, VERGE ON REASON, BIZARRE X, CYNESS

more than
10 bands in 12 hours,
veg./vegan food,
tickets inclusive
parking/camping:
10,- €
info/tickets:
0177 7368840
wifagena@freenet.de

Jugendhaus Hammerstadt

(Rietschen Landstr.16 - between Cottbus - Görlitz)

31.08.2002 / 13.00 Uhr

presented by W.I.F.A.G.E.N.A. info/powered by: www.kommaerzbanck.de

※今夏に行なわれたヨーロッパ·ツアーに組み込まれたフェスティバルの巨大ポスターを縮小したもの。共演バンドも堂々たるメンツ!!!

Marcelo：本当の話なんだけど、たまに可笑しいことがあるよ(笑)。でもワールドワイドなアンダーグラウンド・シーンは違う文化を背負っていても、それをお互いリスペクトするし、だから面白いんだと思うよ。

――最近自分の身の周りで何か良い事ってありましたか？
Marcelo：去年まで毎日12時間労働しなくちゃいけなかったのが、今年それから解放されたことだね。

――日本についての感想は何かありますか？
Marcelo：たくさん素晴らしいバンドがいるよね。UNHOLY GRAVE、MELT BANANA、LIPCREAM、S.O.B.、OUTO、GAIA、CORRUPTED、KURO、CONFUSE、GAI、BELETH、CASBAH、MESSIAH DEATH、SIC、THE STALIN、IDORA、NAUSEA、VOLTIFOBIAとかいっぱいいるよね！ あとBloodbath Records、MCR Company、Nat Recordsも素晴らしい。あと日本に住んでいる友達が今、DERENGED INSANEってバンドを始めたんだ。チェックしてみてくれ！

――今後の予定とかはどうなっていますか？
Marcelo：この前終わったツアーの後しばらく休暇をとっていたんだけど、またすぐに再開するよ!!! あとUNHOLY GRAVE、DEATH SLAM、WOJCZECH、ANSIA DE VOMITOとスプリット盤を出す予定だよ。

c/o Marcelo
Caixa Postal 302
Osasco/SP
06016-970 BRAZIL

『Old Dirty Grindcores』CD
(2+2=5 Records：Caixa Postal 1668 Sao Paulo/SP CEP 01059-970 BRAZIL)
(Rotthenness Records：Caixa Postal 1197 Sao Paulo/SP CEP 01059-970 BRAZIL)

Canadian Hardcore Panx

ANTI-CIMEXのパロディ・ジャケット、現在大人気のHAYMAKERとのスプリット7"EPをリリース、『MAXIMUMROCKNROLL』誌に記事が掲載される等々、最近話題になることが多かったカナダのOX BAKER。80年代を彷彿させるアグレッシヴなスラッシュ・ハードコアを展開している、今カナダで注目すべきバンドのひとつである。

INTERVIEW

──まず、最近調子はどうですか?

Mike Woodford:リリースされたレコードを聴いて、ショウを観て、新しい友達と出会えて最高に素晴らしい日々を送っているよ。でもバンドを解散するって決断したことが大きく変わったことかな。

──えっ? どういうことですか?

Mike Woodford:経緯を説明すると、まず俺とドラマーであるErskineと1999年の夏にOX BAKERは結成したんだ。退屈凌ぎで面白半分で始めたって感じだったんだけど、PROPOSITION OF CHANGEというバ

ンドの奴等がショウをブッキングしてくれてね。そして何度かメンバーチェンジがあった後、レコードをリリースすることになってそれでレコーディングをしてたんだけど、2002年夏にギタープレイヤーのKyleが大学へ行くために辞めてしまったんだ。それで…。

——なるほど。解散したのに今回インタビューをするのは何か変ですね…。ではバンド名についてですが、これってプロレスラーの?
Mike Woodford:そうなんだ。Ox Bakerっていうのは、1970年代に活躍して人気者だったプロレスラーなんだ。彼は今アメリカでレスリング・スクールを経営しているんじゃないかな。一般的にはJohn Carpenterの「Escape From New York」やJackie Chanの「The Big Brawl」に出演していることが有名なんじゃないかな。

——OX BAKERを始めるにあたって、影響を受けたバンドは?
Mike Woodford:まず日本のバンドにもたくさん影響を受けているんだ。GAUZE、JUDGEMENT、EVANCE、NICE VIEWとかね。もちろんCAPITALIST CASUALTIESやSPAZZ、LEFT FOR DEADとかアメリカのバンドにもたくさん影響を受けているね。

——そういえば、カナダって日本に似ている気もするんですよね。ビッグなバンドがそれほどいないというか…。
Mike Woodford:日本にはビッグなパンク、ハードコア・バンドがいると思うけど。GAUZEやBASTARD、PAINTBOX、LIP CREAMとかね。日本にはたくさんナイスなバンドがいるから、是非行ってみたいよ。あと俺はあまりカナダのハードコアと出会っていないかもね。

——(そういう意味のビッグじゃなかったんだけどね….。)カナダのシーンについて教えてもらえますか? 僕的にはDerangedってレーベルが良い感じだと思うんだけど。
Mike Woodford:そうだね、DerangedのGordがリリースするレコードはたくさんあるけど、どれも良いものばかりだよね。カナダには他にも素晴らしいレーベルがあるんだよ。SchizophrenicやSolomon Methodとかね。まあ、カナディアン・ハードコア・バンドは盛り上がっているんじゃないかな。有名なところでいえば、D.O.A.なんてたくさんのパンクロック・キッズに知られているんじゃないかなと思うし。カナディアン・ハードコア・バンドの場合、長続きしないっていうのが問題だと思うんだよね。

——でも良い雰囲気って感じなんですね。
Mike Woodford:うん。ハードコア・シーンは大きくなっていると思うね。でもアティチュードが酷い奴もいるけどね。女の子やお金を得るためにバンドをやっている、そんな奴もたくさんいるんだ…。

——次の質問です。OX BAKERといえばまずHAYMAKERとのスプリット盤のイメージがありますが、どうでしょう?
Mike Woodford:このスプリット盤を作った経緯として、HAYMAKERのシンガーであるJeff Beckmanとデモテープのトレードをしてたんだ。彼は俺達のデモを気に入ってくれて、Deep Sixにスプリットの話を持ちかけたんだよね。でもDeep SixのBobとしてはHAYMAKERのLPを出したかったようなんだけど、HAYMAKERは自分達のオリジナル曲が少なくて、スプリットにしようってことでお声がかかったんだ。

——今後あなたはどうする予定なんですか?

Mike Woodford：アメリカのBATTLE UNICRONとスプリットEPをリリースして、その後OX BAKERとして最後のリリースとなるディスコグラフィーCDを出す予定なんだ。で俺は、RACE THE DEADという新しいバンドを始めたんだよ!!! だから忙しくなるかもね。

── 期待してますよ!!! ではあなたにとって、ハードコアとは？
Mike Woodford：俺は1987年からハードコアの世界に関わってきたんだけど、ハードコア・ミュージックは俺の生活の中にいつも必ずあった。それはずっとあったね。バンドでプレイするのはもちろんだけど、ショウをオーガナイズしたり、何らかの形でシーンをバックアップしてきたと思うよ。

── では最後の質問なんですが、個人的な趣味の話でごめんなさい…。僕の永遠のフェイバリット・バンドとして、80年代スラッシャーVOI VODとSLAUGHTERは絶対に外せないんです!!! 彼等はカナダでは実際ポピュラーな存在でしたか？
Mike Woodford：VOI VODはメタルの世界では凄く有名だったけど、パンクやハードコアの世界ではそれ程評価されていなかったんじゃないかな。SLAUGHTERは全く知られていなかったと思うよ。いまだに知らない人は多いんじゃないかな。

バンド名、サウンド、ライヴ・パフォーマンス。全てにおいて強烈なインパクトを放ち、音楽という従来の概念を完全に無視したスタイルは文句なく個性的であった。一時解散説が流れ

INTERVIEW

――ANAL CUNTが再始動しましたね。そのことについて何か教えて下さい。

Seth Putnam:ANAL CUNTは2003年にオリジナルなバンドとしていくつかショウをやることになっている。しかも1988年から1990年の頃の曲ばかりやるんだ。ラインナップはヴォーカルが俺、ギターリストがMike Mahn、あとオリジナルじゃないドラマー。というのはオリジナルなドラマーはもうできないんだ。

――ANAL CUNT以外にもいろんなバンドに関わっていますよね。例えばINSULTとか。それらのバンドについて教えてください。

Seth Putnam:たしかに俺はいろんなバンドでプレイしている。でもINSULTにはもう関わっていないよ。今俺が関わっているバンドは、まずYOU'RE FIREDというファスト・ハードコアでギターをプレイしている。あとADOLF SATANというBLACK SABBATHのようなスローテンポなバンドでドラムを叩いている。あとFULL BLOWN A.I.D.S.。凄いヘヴィなサウンドで俺はそこでヴォーカルとギターを担当しているんだ。まだまだ他にもやるかもしれないけど。

――そういったいろいろな音楽をやっていますが、どういったバンドに影響を受けたんですか?

Seth Putnam:NEGATIVE APPROACH、BLACK SABBATH、古いデスメタル・バンドだとMANTAS、VENOM、SLAYER、HELLHAMMER、あとTHE F.U.'S、RAMONES、SEX PISTOLSとかだね。

――現在のハードコアやメタルはどうですか?

Seth Putnam:よくわからないね。何年も前からそういうのは別に気にしていない。

――ボストンのハードコア・シーンはどうですか?

Seth Putnam:退屈だと思うね。

――ハードコアは怒りを表現した音楽ですよね?

ていたが、2003年ライヴ活動を行なうという。しかも初期のスタイルに戻ったとの噂もあり非常に気になるところ。そこで、アンダーグラウンド・シーンのカリスマSethに直撃した。

Seth Putnam:もちろん俺もそう思う。

── では昨年の9月11日以降、あなた自身何か影響はありましたか?
Seth Putnam:違法入国した奴らがアメリカを食い物にしておきながら、アメリカの国旗を持って潜んでいるというのが笑えるね。

── そろそろアメリカはまたイラクを攻撃しそうですよね。どう思いますか?
Seth Putnam:結局、誰かがイラクに対して何かしなくちゃいけないからね。他の奴らがみんな言っているわけじゃないけど、イラクが無差別に攻撃を仕掛けたら、アメリカ国民は攻撃しろって言うだろうな。やっぱりサダム・ムセインは数年前に殺されなきゃいけなかったんだ。

── 日本についての感想を。
Seth Putnam:俺は日本が好きなんだ。ANAL CUNTとして2度ツアーをしているけど、ショウに来てくれた奴らはみんなクールだったね。2003年3月にはNAPALM DEATHとPIG DESTROYERとツアーすることになっている。3月10日が大阪、11日が名古屋、13日が東京でやるんだ!!!

『Very Rare Rehearsal from February 1989』CD
(Shipman Records:4-31-11 Eifuku,Suginami-ku,Tokyo 168-0064 Japan)

今年リリースされた最新CD。ノイズ・グラインドと言われていた頃の未発表リハーサル音源集で、初期のカリスマ視されていたANAL CUNTの魅力満載。詳細はレビューページ参照。

AVULSION

GRINDCORE from NEWYORK

様々な文化が存在し混沌とした印象を感じさせるニューヨークは、時代の流れは速いけれど、
あらゆる点で斬新なものが生まれてくる地でもある。
そのため、ヘヴィメタル、ハードコア、ジャズ等々の音楽が交配するのも極自然なことなのだ。
AVULSIONは100%グラインドコアであることは間違いないと思うが、
一般的に知られているメタリック・グラインドコアとは少々違って、
所謂ハードコア・シーンに属しているのが興味深い。
本物のグラインドコアを知りたければ、AVULSIONを聴くしかないだろう!!!

INTERVIEW

── AVULSIONってバンド名についてですが、どういった意味が込められているのですか?

Matt:AVULSIONって意味には2つの意味があるんだ。でも基本的には同じコンセプトなんだけどね。まず1つ目は怪我をして体を切ってしまったとか、あるいは切断しなくちゃいけないってこと。どんな奴でもあまりにも酷い怪我をしたら、体の一部を引き裂かれるって意味を込めているんだ。2つ目の意味としては、世界中のあらゆる所で大きな地震があり、土地が引き裂かれる。キミは知っているか分からないけど、いつかカリフォルニアは海に沈むって言われているんだよ。俺達の音楽はそういった荒廃した世界を表現するのにピッタリだと思ってAVULSIONって名前にしたんだ。

── ではAVULSIONとしてバンドがスタートしたのはいつ頃ですか?

Matt:ドラムのJim Millerと1992年の夏にAVULSIONを始めたんだ。彼とは音楽的に同じような趣味だったからね。その後にSLAVE STATEのJohnとTonyが参加したんだ。その間ベースプレイヤーは何度か代わっているね。2、3年前、1度AVULSIONは終わりにしたんだけど、そのだいたい1年くらい前にJimは辞めてしまったんだ。でもまた始めることになって、現在のラインナップはドラムがKen、ベースがRoger、ヴォーカルがTonyとRyan、そしてギターがEricと俺だ。

── AVULSIONって音楽的に説明すると何だと思います?

Matt:俺としてはグラインドコアだと思っている。グラインドコアっていうのはメタルとハードコアとパンクがミックスしたものだと思っているからね。だから俺達はそのカテゴリーがピッタリだと思う。

── では音楽的にどういったバンドに触発されたんですか?

Matt:NAPALM DEATH、DROPDEAD、CARCASS、MORBID ANGEL、SUFFOCATIONとかだね。俺はこれらのバンドを永遠に聴き続けるだろうな。

――ヴォーカルが2人いるのはなぜですか?
Matt:俺達は低音のデスメタル・ヴォイスと、いろんな声を出せるハードコア・ヴォイスが欲しかったっという理由だけなんだ。

――あなた達のレコードには大抵サムライが描かれていますが、好きなんですか?
Matt:そうだね。実際俺はマーシャルアーツもやっていて、夜はスクールでいろんな人に指導をしている。実は俺はテコンドーの1段と、剛柔流空手の2段を持っているんだ。

――所謂インディペンデント・レーベル、またはDIYレーベルからレコードをリリースしていますよね? なぜ大きなレーベルと契約しないのですか? Relapse辺りからオファーはなかったのですか?
Matt:インディペンデント・レーベルはツアーを組んだりはしないけど、俺達のレコードをリリースしてくれたり、いろいろな形でヘルプしてくれるんだ。それはバンド側である俺達もレーベル側に、何らかの形で貢献しているつもりだよ。俺達のレコードは比較的早くさばけるから、レーベル側は多少お金を得ることができる。Relapseに関しては今までオファーはなかったな。所謂"ビッグレーベル"はツアーのセッティング、アルバムのプロモーション等々やってくれるところだよね。

――所謂大手メジャーレーベルではないので、そこまでやってくれるのかどうかまではわかりませんが、規模としてインディペンデント・レーベルとしては大きなところですよね。
Matt:そうだろうな。そういったところと契約すると、請求書の支払いは当分来なくなって、1ヶ月以上ツアーをして、食事も十分過ぎる程とって…。でもエクストリーム・ミュージックがそこまでポピュラーじゃないからなぁ。そうなればいいね(笑)。

――ところで、現在のハードコア・シーンについてはどう思いますか?
Matt:どういった見方をするかによって違うと思うんだけど、俺的には凄くクールだと思うね。他のシーンと比べて、いろんなバンドやレーベルが

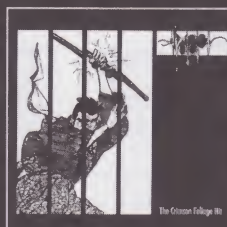
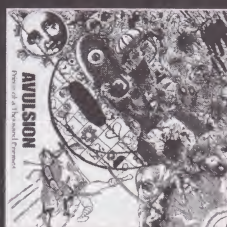
AVULSION

関わっているし刺激的だね。俺達が他のバンドよりも良いわけじゃないけど、もちろん競争ではないんだ。誰もが自由に表現していいと俺は思う。あと俺は何人かとレコードのトレードをしているんだ。それは俺にとって素晴らしいことだね。でもその時に使うお金っていうのはレコーディングやTシャツ製作、ツアーとかから得たものなんだ。俺達は金持ちじゃないから、レコードをいろんな人にプレゼントするってことはできないんだよね。

――ニューヨークのハードコア、グラインドコア・シーンはどうなっているんですか?
Matt:ニューヨークはエクストリーム・ミュージックと出会えるチャンスはいくらでもある。たくさんクールなギグがあって、良い奴等がいて、現在のニューヨークは良い状況なんじゃないかな。ただ、大半が商業化されたものが多くなってしまっているけどね。ラジオで流れているバンドやMTVなんかに出てくるバンドはクソだし。しかもキッズはそういった音楽ばかり聴いているのが現状で、OFFSPRINGやKORNなんかがハードコアって言ってる奴もいる。あんなクソはジョークにしか思えないのに。どいつもこいつも同じような音を出しているだけだし。だからそいつらみたいに皆、本物のパンクやハードコアを知らないから、グラインドコアなんて聴くまでには至らないだろうな。エクストリーム・ミュージックがもっといろいろなところに露出する回数が増えれば人気が出ると俺は思う。

――そういった中で、ニューヨークといえばCANNIBAL CORPSEがブルータルなバンドとしては有名だと思いますが、彼等についてはどう思います?
Matt:彼等はニューヨークといってもバッファロー出身だけどね。話をしたことがあるけど、みんなクールな奴等だったね。彼等の音楽もクールだし俺は好きだね。

Green Scare

Living Life Through the Five Senses
(Recalcitrant Noise)

The Crimson Foliage Hit
(625)

Prince of a Thousand Enemies
(Impatience Or Indifference)

※これ以外に1996年LACERATIONとのスプリット盤がClean Plateからリリースされています。

――9.11はあなたにとって、何か影響を与えましたか?
Matt:9.11の悲劇的な事件に巻き込まれた人で、個人的に知っている人はいなかったんだけど、多くの人に影響を与えた事件でもあったよね。

――アメリカ軍は年内にもイラクへの攻撃を始めそうですが…。
Matt:そうだろうね。アメリカ政府はとにかくフセインを捕まえたいみたいだし。奴は狂った兵器を持っていて、狂った使い方をしかねないからね。フセインを捕まえていれば、9.11のような悲劇もなかったかもしれないし、核兵器や細菌兵器みたいなものも無意味になるんじゃないかな。

――今後の予定を教えてください。
Matt:『Crimes Against Reality』という最新フルレンジCDがリリースされるよ。あとSOA Recordsからリリースするレコード用に、今年の冬はスタジオに入る予定になっている。AVULSIONやエクストリーム・ミュージックをチェックしてくれ。

MUKEKA Di RATO

『Acabar Com Voce』CD
(Sound Pollution)
Distributed by MCR Company
157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN

90年代ハードコア最重要バンドLOS CRUDOSのブレイクにより、ラティーノやチカーノだけでなく南米各国にも注目が集まり、唯一スペイン語ではなくポルトガル語圏のブラジルにも、当然同様の注目を集めた。特に最も勢いがあるこのMUKEKA DI RATOを聴くと、南米独特の空気感を感じるだけでなくクオリティの高さに驚き感動する…。お互い酷い英語力のためインタビューは大変苦労したけど、普段あまり読むことのできないブラジルのバンドなので要チェック!!!

INTERVIEW

Mozine:俺の英語は酷いからあまり難しい質問には答えられないよ。

── 了解しました。僕も酷いので大丈夫です(笑)。
Mozine:まあ、がんばってみるよ。

── 調子はどうだい?
Mozine:周りにムカつく奴はいないし、みんなクールな奴らばっかりだから良い感じだよ。彼女と家でコーヒーを飲んだり、テレビを見たり。レイシズムな奴らはムカつくけど。

── ではMUKEKA DI RATOは恐らくSound Pollutionからリリースされたって情報しか知られていないと思うので、今日までの経緯を教えて下さい。
Mozine:俺は元々、他のMUKEKA DI RATOのメンバー2人とアナーコ・パンク・バンドでプレイしていたんだ。どういったバンドかというと、80年代のブラジルのバンドのカヴァーばかりやっていたんだ。解散後、俺達3人はまた集まってBrelのために凄く安いドラム・

キットを買って、俺もベースを買ったんだよね。で、Dudaというギターリストと Sandtoというシンガーも見つかって。その後も、Sandroの幼馴染みで、90年代初頭にブラック／デスメタル・バンドでベースを担当していたPaulistaが、ギターリストとして俺達のバンドに入ったんだ。彼は当時本当にヘタだったね(笑)。でもそれは俺達にとって問題ではなかったんだ、つまりイイ奴だったんだよね。で俺達は彼に「お前さ、お前の酷いギタープレイ何とかなんないのか」って言ったんだ。そしたら彼はFUGAZIを何度も何度も聴いて、そしてSONIC YOUTHのようなノイジィーなサウンドを手に入れたんだよ。この時のラインナップで1997年リリースの『Pasqualin』、1999年の『Gaiola』の2枚のCD出したんだんだけど、あと数枚レコードあったかな。そのレコードを出した後にSandroが学校に行きたいっていうのでバンドを脱退して、その替わりに当時俺達のローディーをやっていた現在のBebeが入ったってわけ。このラインアップになってからはSound Pollutionからリリースされた3rd CDの他に、フランスのCOCHE BOMBAとのスプリットEPを作ったんだけど、まだまだ他に出す予定でいるよ。

── MUKEKA DI RATOってどういう意味なんですか?
Mozine:MUKEKAの語源はMouquecaっていうんだけど、俺達の町であるVila Velha Beachの典型的な食べ物の名前なんだよ。RATOはRat。なぜそういう名前を選んだかというと、たしか1994年の終わり頃に、ブラジルの北東に住む極めて貧乏で惨めな生活を送っている人がいる、というのを新聞で読んだんだ。俺達の音楽はローカル・バンドでクソ音楽だから、表現する上でぴったりだと思ってこういう名前にしたんだ。

── 音楽的にインスピレーションを受けたのはどういったバンドですか?
Mozine:80年代のブラジルやフィンランドのファスト・ハードコアかな。あとはアメリカのバンドにも多少影響を受けてて、DEAD KENNEDYS辺りは歌詞の面でも影響を受けているかな。

── 英語で歌わない理由は?
Mozine:まず言えるのは、俺達はポルトガル語で歌っている。スペイン語とかで歌うのも凄いクールだと思うけどね。でも俺はブラジルが大好きだからポルトガル語で歌うんだ。英語の歌詞を作るより俺達としてはポルトガル語で歌った方が楽だし、自然だと思うんだよね。英語よりファスト・ハードコアにはポルトガル語が凄いピッタリじゃないかな。日本のバンドに関しては、日本語で歌うのがピッタリだと思う。英語で歌ってもそれはそれでクールだと思うけど、バンドを通して表現するのであれば、自分達の歌いやすい言語で歌うべきだと思う。だから俺達はポルトガル語で歌っているんだ。

── 現在のハードコア・シーンについて思うことは?
Mozine:毎日いろんなバンドがギグをして、凄い良い状況だと思っているよ。俺の友達はみんなそう思っているんじゃないかな。俺は全ての良い事が刺激になっているし。

── ブラジルのハードコア・シーンは?
Mozine:もっといろんな良いバンドが一般的に知られるようになれば、クソ・ファシストやレイシストを打ちのめすことができるのになと思うけどね。グラインドやメロディック系、スカ系のバンドにも、もっとフレンドシップのあるバンドが出てくればいいのに。俺はそういうバンドも好きだし、みんな一緒になって刺激し合えればクールだよね。

── 今回、あなた達以外にブラジルのバンドとして、ROTにもインタビューに答えてもらっているのですが、彼等についてはどうですか?
Mozine:俺達は彼等と大親友だし、大好きだね!!! ベーシストのAlexは特に大親友だしね。一度RATOS DE PORAOと一緒にヨーロッパ・ツアーしたこともあるんだ。サンパウロにある彼の家にも行ったことがあるし、一緒に飲んだり、レコードのトレードもしているんだよ。俺が思うに、ROTは世界で最強のグラインドコア・バンドじゃないかな。

── そのRATOS DE PORAOについてROTにも同じ事を聞いたんですが、彼等が一時期メタリックなクロスオーヴァー・サウンドに変わった時、パンクスに攻撃を受けたらしいのだけど…。
Mozine:う～ん…。RATOS DE PORAOはアンダーグラウンドで凄いハードでクレイジーな歴史があるんだ。それを英語で説明するのは難しいな…。たしかに彼等は一部のクソ・アナーコ・パンクスに攻撃を受けたんだ。でたしか同じ奴らがマクドナルドや教会にも攻撃をし、そこにいる人から金を奪い取って希少性の高いレア盤を買っていたんだ。詳しくは覚えていないけどね…。とにかくRATOS DE PORAOは、20年近くスゲエ音楽をプレイしてきて、ある意味プロフェッショナル且つクールなバンドなんだ。俺達は政府から何の援助もされていないし、そういうクソ野郎には

ファック!って言いたいね。俺はブラジルのパンクスについて悪くは言いたくないけど、そういう奴等はモヒカン頭にして革ジャンにGBHのペイントをして「俺はパンクだ!」なんて言ってる。奴らはナンセンスだ。俺は10年以上前からパンクスの友達がいるけど、彼等の場合貧しいコミュニティーで働いて、そしてストリートでメッセージボードを持って、貧しい人達のためにアクションをしていた。本物のパンクスは人に危害を与えるようなことはしないし、家でちゃんと本を読んで勉強をしたり、ヴィーガン・フードを食べたりしているんだ。

── では話を変えて、Sound Pollutionから『Acabar Com Voce』をリリーすすることとなった経緯を教えてください。

Mozine:何年も前からSound PollutionのKenとはCDのトレードをしていたんだ。HELLNATIONがブラジルにツアーで来た時から、彼とは良い友達関係になれたと思う。その時、Kenからブラジル以外のレーベルからCDを出さないの?って聞かれて。俺はSound Pollutionが大好きだし、グレイトなレーベルだと思うし、Kenは素晴らしい友達であって人間的にも最高だしね。それでリリースすることになったんだ。日本のバンドとも、スプリット盤を出してみたいよね。

── その日本についての印象は?

Mozine:そうだな、俺は日本へ行くことが夢でもあるんだ。日本のバンドは凄いクレイジーで、みんな優しくてナイスな人ばかりだからね。HELLNATIONのKenはツアーで行って、凄いクールだって言ってたよ。

── 最近の南米、またはラテン系のハードコアといえば、LOS CRUDOSの功績って大きいと思うのですがどうでしょう? それともハードコアとしての括りにするのは変ですが、SEPULTURAやBRUJERIAの功績によるものだと思いますか?

Mozine:そうだね、SEPULTURAは英語で歌っているけど、バンド名はブラジルの言葉だからね。LOS CRUDOSは本当にグレイトなバンドだと思うよ。アメリカにいながらスペイン語で歌って、凄いクールな事を歌っているし。ラテン系の言葉で歌うということを、彼等によってクールだって再認識させられたんじゃないかな。BRUJERIAも凄いクールだね。俺は彼等のこと大好きだし、スペイン語で歌っているというのも良いよね。

── では最後に一言。

Mozine:結成して10年になるんだけど、俺達はスゲエ仲が良いから死ぬまでプレイしていくだろうな。

MUKEKA DI RATO
A C A B A R　C O M　V O C E

Photo by Marielle Carlsson

残念ながら日本においてほとんど無名に近い存在ではあるが、ヨーロッパ·ツアーをする等かなり活動的且つ勢いのあるMISCONDUCT。若手でありながら、その初々しさを感じさせない程貫禄のあるライヴ·パフォーマンスは、誰もが釘付けになること間違いない、と私は実際にライヴを体験して感じた。つまり日本では音源が入手困難で無名だけど、まだまだ世界には素晴らしいバンドが存在するということなのだ。

MISCONDUCT

INTERVIEW

── MISCONDUCTって名前にしたのはなんでかな?
Fredrik"OLLO"Olsson:この惑星、この地球上で他に同じ名前が存在しないものにしたかったんだよね。それでMISCONDUCTにしたんだ。

── じゃあ今までのMISCONDUCTの歴史を簡単に教えて。
Fredrik"OLLO"Olsson:スウェーデンにある小さな町に住む奴等が集まってできたんだ、MISCONDUCTは。80年代後期、または90年代初期のハードコア·バンドみたいなことをやってたんだけど、95年の秋と96年の始めに、僕達の最初の音源であるデモテープ『Like The Old Days』をレコーディングしたんだ。オールドスクールなハードコア風の音になっていて、もの凄く短い曲が7曲入っているんだ。それがBad Taste Recordsの目に止まったっていうのが大きな流れかな。

── オールドスクール·ハードコアというと、やっぱりニューヨーク·スタイルのこと?
Fredrik"OLLO"Olsson:バンド始めた頃影響を受けたのはそうだね。GORILLA BISCUITS、YOUTH OF TODAY、SICK OF IT ALL、あとはMINOR THREATとかだね。

── 最近どんなことしてた?
Fredrik"OLLO"Olsson:まず今年の夏はだいたいスウェーデン国内でライヴをやっていたね。1回フェスティバルにも参加したかな。あと7月の終わりのレコーディングをしたんで、そろそろ次のアルバムが出る予定になっているんだ。でその後はまたイギリス·ツアー、ヨーロッパ·ツアーをしたんだ。今年の冬はカナダとアメリカ·ツアーをしようと考えているんだよ!!!

── ライヴを見たけど凄いノリだよね!!! 毎回激しいライヴやってるの?
Fredrik"OLLO"Olsson:そうだね、僕達MISCONDUCTは常に100%以上の力を出してライヴをやっているんだ。オーディエンスが激しく盛り上がることも、僕達にとっては凄く重要だよね。

── 昔のBIOHAZARDの曲をプレイしてたけど、あれはよくプレイするの?
Fredrik"OLLO"Olsson:やらないよ。共演するバンド、オーディエンス等々を考慮し

Photo by Marielle Carlsson

MISCONDUCT

Booking : martin@badtasterecords.se
Mail: info@misconduct.nu

てやっているから、その時その時のライヴによって違うんだ。だから全く違った曲をプレイしているから楽しいし、それは自分達にとって正しいやり方だと思っている。

──キミ達にはいろんな友達がたくさんいるよね。NASUM、DS-13、SATANIC SURFERSとか。普段彼らとプレイしているのかな?
Fredrik"OLLO"Olsson:もちろん。僕達はたくさんのスウェディッシュ・ハードコア・バンドと共にプレイしているよ。WITHIN REACH、59 TIMES THE PAIN、INTENSITYとか、ほんとにいろんなバンドと共演している。一緒にツアーしたこともあるしね。

──ところで、最近のハードコア・シーンについて何か感じることはあるかな?
Fredrik"OLLO"Olsson:今風のバンドはピークが過ぎて、人気は下降しているような気がするね。でもこのような動きは繰り返されるんだ。世界中の人が再びオールドスクールに興味を示し始め、本物のストロングなハードコア・シーンが蘇ると思うよ。

──スウェーデンのハードコア・シーンはどう?
Fredrik"OLLO"Olsson:スウェーデンのシーンも世界の国々と状況的には一緒じゃないかな。昔風のハードコアの大半が解散しちゃっているし、周りにいる奴等の多くがメタルになる傾向にあるんだ。悲しいことだよ。でも僕はオールドスクール・スタイルに興味があるし、そいつらとは関係ないよ。96年から97年くらいのハードコア・シーンの雰囲気が良かったな…。

──日本についてはどう思ってる?
Fredrik"OLLO"Olsson:僕は日本って国は本当に好きなんだ!!! 古い神話、アートとかいろいろ興味あるんだよね。そして、日本って凄く面白い歴史を持っていると思う。あとハードコアで言えば、今まで僕はいろいろな日本のバンドを聴いたよ。一番好きなのはBLIND JUSTICEだね。たしか59 TIMES THE PAINとのスプリット盤だったと思うんだけど、あれは最高に良かったね。とにかく、僕達は日本のハードコア・バンドと一緒に日本でツアーをしたいね。

──では最後に、キミにとってハードコアのライフスタイルって何だと思う?
Fredrik"OLLO"Olsson:MISCONDUCTとしてハードコア・バンドをプレイすることによって友情が芽生え、楽しい生活を送るってことだね。最新アルバム『One Last Try』には、まさにそのことについて僕らなりに表現している。それには、僕等をサポートしてくれる人がいるからこそできたものだから、感謝の意味も込めているんだ。

従来の音楽観からすると音楽として認められず、常に除外され続けていたゴア・グラインドであるが、肝心の音楽を疎かにせず残虐さをとことん追求し、ビジュアル・イメージを効果的に取り入れ独自の世界を築きあげた。中でも第一人者としての地位を不動のものとした感のあるスペインのHAEMORRHAGEは、人気、実力共に他を寄せつけない程で、あらゆる面でメインストリームとは無縁とはいえ無視することはできない。万人受けするには程遠く厳しいかもしれないけど、これぞまさに地下臭満載のバンドといえるのだ。

INTERVIEW

── まず最初に、HAEMORRHAGEってどういう意味なんですか?

Luis Manuel Quiroga:これは英語で血が吹き出すって意味なんだ。元々は医学用語でもあるんだよ。(※注:英語ではHemorrhageと表記して医学用語で「出血」を意味する)

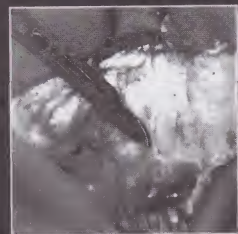
── HAEMORRHAGEの歴史を簡単に教えてください。

Luis Manuel Quiroga:1990年にグラインド・ノイズ・ゴア・プロジェクトとして結成したんだど、1994年まで全然メンバーが決まらなくてね....。で、大きな流れとしては1995年には1stアルバム『Emetic Cult』をMorbid Recordsからリリースして、1997年には『Grume』、1999年に『Anatomical Inferno』、2000年に『Loathesongs』と『Scalpel, Scissors And Other Forensic Instruments』を、そして今年『Morgue Sweet Home』をリリースしている。あとは今までたくさんギグをやって、ツアーもしているし、その時いろんなバンドと共演しているよね。例えばDEAD INFECTION、EXHUMED、REGURGITATE、PUNGENT STENCH、CANNIBAL CORPSE、AGATHOCLES、IMMOLATION、ANAL CUNT、CRYPTOPSY、CSSO、KREATOR、MOTORHEADとかね。まぁ、こんな感じかな。

── あなた達はどんなバンドに影響を受けたんですか? やっぱり初期CARCASSですか?

Luis Manuel Quiroga:もちろん。

『Grotesque Embryopathy』Demo
(1992)

split EP with CHRIST DENIED
(Morbid Singles Productions /1994)

『Emetic Cult』CD
(Morbid Records /1994)

『Scalpel, Scissors
and Other Forensic Instruments』Demo
(Ironia Records /1994・1995)

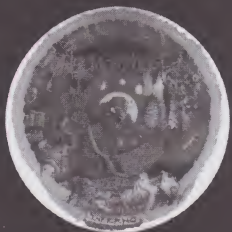
split EP with DAMNABLE
(T&M Records /1996)

※1995年にDeliria ProductionsよりリリースされたEXHUMEDとのスプリットテープ、1998年のプロモテープはジャケがないため掲載してません。

split Tape with C.S.S.O., DEAD INFECTION (Obliteration /1996)

split EP with DENAK (Upground Records /1998)

split EP with GROINCHURN (Morbid Records /1998)

『Anatomical Inferno』CD (Morbid Records /1998)

『Anatomical Inferno』Picture LP (Morbid Records /1998)

──ってことは、1990年頃のイギリスのEaracheやPeaceville辺りに影響を受けたって感じですか?

Luis Manuel Quiroga:そうだね。初期CARCASS、NAPALM DEATH、TERRORIZER、REPULSION、O.L.D.、XYSMA、GENERAL SURGERY、PUNGENT STENCH、MACABRE、EXTREME NOISE TERROR、DOOMとかだね。

──HAEMORRHAGEの歌詞は全て英語ですよね。なぜスペイン語で歌わないのですか?

Luis Manuel Quiroga:この種の音楽にはスペイン語は合わないと思うんだ。あと一応言っておくけど、俺達の歌は医学への冒涜ではないよ!!!

──でもなぜあんなにブルータルな歌を歌うんですか?

Luis Manuel Quiroga:そりゃ好きだからだよ。

──ところで、CANNIBAL CORPSEってどう思います? 10年前は残虐なイメージと凄いインパクトがあったけど、あなた達のようなバンドが存在する今となっては、物足りない気もしませんか?

Luis Manuel Quiroga:俺は特別CANNIBAL CORPSEのファンでもないし、思い入れもない。たしか1997年に彼等とは共演したね。彼等は良いバンドだとは思うけど、フェイバリット・バンドでもないんだ。俺は1st『Eaten Back To Life』と2ndは聴いていた時期はあったけど。中では1stがベストだね。正直俺は所謂ブルータル・デスメタルってあんまり好きじゃないんだ…。

──僕は昔CANNIBAL CORPSEのファンでしたね(もちろん1stがGood!!!)。でそのCANNIBAL CORPSEですが、昔はいろいろとトラブルがあったらしいんです。彼等より残虐なイメージのあるあなた達も、アクシデントに見舞われたことってあるんじゃないですか?

Luis Manuel Quiroga:俺はトラブルにあったことはないけどね。でもCANNIBAL CORPSEの場合、アルバムが税関で止められたってことは聞いたことがあるね。

──スペインの状況を教えてもらえますか?

Luis Manuel Quiroga:グラインドコアに関していえば、再び盛り上がってきているんじゃないかな。大抵の人がドゥームやゴシック、ブラックメタルとかを聴いているけど、そろそろヴァイオレンスで且つ強烈な音楽を聴きたくなってきている時期なんじゃないかと思うね。

──ハードコアについてはどう?

Luis Manuel Quiroga:俺は昔のハードコアばかり聴いて最近のは全然聴かないから、ハードコア・シーンについてはあまりよく分からな。

──そのスペインについてなんですが、バルセロナってよく行きますか?

Luis Manuel Quiroga:そりゃもちろん何度も行ったことあるよ。

──というのは、僕は今年バルセロナへ行ったんですが、この種の音楽を扱っているレコードショップが見つからなかったんです。あなた達の住んでいるマドリッドには、そういったナイスなレコード屋はありますか?

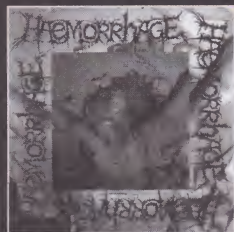
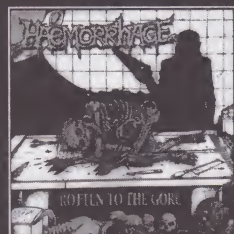
Luis Manuel Quiroga:冗談だろ? 俺は繁華街にある店をいっぱい知っているぜ。

"Ramblas"っていう場所に有名な通りがあって、その通りの近くに小さい道がいくつかあるんだ。そこにいくつかクールなレコードショップがあるよ!!! マドリッドには2、3店舗あるね。もしキミがマドリッドに来ることがあったら、連絡してくれ!!! いろいろナイスなところがあるから案内するよ。

── あとスペインで推薦できるものって何ですか? 僕が感じたのは食べ物がどの国よりも最高でしたね!!!

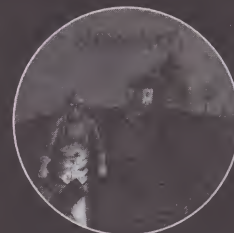
Luis Manuel Quiroga:あとはドリンクだ!!! ワイン、ビール、いろんなアルコール類があって、しかもそのどれもがそんなに高価なものじゃないしね。あとは夜中にパブやバー、ディスコ、クラブに行くことをお薦めするね! 俺が言いたいこと、わかるだろ(笑)。

── なるほど、わかりました…。ところで毎回Morbid Recordsからリリースするのはどうしてですか? Relapseからリリースすることはないの?

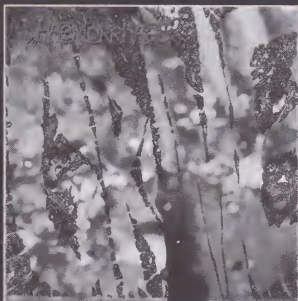
Luis Manuel Quiroga:もしキミがRelapseの人間で知っている人がいたら、紹介してくれよ(爆笑)。

split EP with INGROWING
(Copremesis Records
·Shindy Production /1999)

split EP with EMBOLISM,
SUFFOCATE, OBLITERATE
(Erebos Productions /2000)

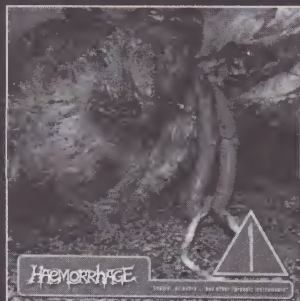
split EP with GONKULATOR
(Fudgeworthy Records /2001)

split Tape with MASTIC SCUM
(Shindy Productions /2001)

split Picture EP with WTN
(Incide to Excise /2002)

『Morgue Sweet Home』 Picture LP
(Morbid Records /2002)

『Emetic Cult』CD
(Morbid Records /1994)

ブルータル・デスが主流となりブラックメタルが頭角をあらわしてきた時期に、初期CARCASSからの影響を感じさせるアルバムとして重宝された1st。内臓病理系の如何わしいサウンドと行き過ぎたビジュアル・イメージは現在も人気が高い。大傑作且つ名盤。

『Grume』CD
(Morbid Records /1996)

現在のゴア・グラインドの基礎を作ったと言っても過言ではない程荒々しさが増し、グラインドコア特有の高速ビートを多用した2nd。イメージ先行の向きがあるこの種の音楽において、技術や演奏面のレベルの高さにより頑固たる地位を確立した。

『Scalpel, Scissors
and Other Forensic Instruments』CD
(Copremesis Records /2000)

DAMNABLE、GROINCHURN、DENAK、INGROWINGとのスプリット盤等の現在入手困難となった95年から98年にかけてリリースされた貴重な音源を収録したアルバム。1991年にHAEMORRHAGEとして最初に作られた「Extreme Ulceration」も収録。

『Loathesonds』CD
(Morbid Records /2001)

DEFECATION、CARCASS、ENTOMBED、IMPETIGO、CRYPTIC SLAUGHTER、IMPALED NAZARENEの選曲になる程なと感じさせるカヴァー集。またSUICIDAL TENDENCIESのカヴァーも見事に馴染んでいる。しかし最後のUFOは本気なのでしょうか?

split EP with DEPRESSION
(Cudgel Agency /2001)

アルバム以外の音源としては比較的入手し易いDEPRESSIONとのスプリット盤。結成10周年を記念して行なわれたライヴの音源を収録。ライヴ・バンドとしての実力は本物だと証明している。ある意味ベスト盤的内容に震える。

『Morgue Sweet Home』CD
(Morbid Records /2002)

大傑作との呼び声も高い最新作。かつてのイメージを排除するかのごとく勢いのあるサウンドは、もはやゴア・グラインドの域を越えた新しい姿をあらわにした。ただしHAEMORRHAGEとしての個性を損ねていない点はさすがといえる。

── 誰一人知りません(笑)。では、最近何か良いこととかありましたか?

Luis Manuel Quiroga:最近ってわけじゃないけど、良いことは自然で、世界で最悪なのは人間だね。

── 日本について、どう思いますか? CSSOとは交流ありますよね?

Luis Manuel Quiroga:日本についてあまり知らないけど、CSSOのメンバーから日本のアニメやマンガの歌を教えてもらったよ(笑)。テレビを通していろんな物を見たから、実際行ってみたいよね。

── 最後に何か言いたいことはありますか?

Luis Manuel Quiroga:俺達はIMPLAEDとスプリット盤をリリース予定なんだけど、完成したらアメリカ・ツアーをしたいと思っているんだ!!!

僕とHAEMORRHAGEとのつきあいは96年の僕らCSSOとポーランドのDEAD INFECTIONとの3バンドツアー、GRIND OVER EUROPEから始りました。最初は俺ら、バカだからHAEMORRHAGEをハエモハーゲとか強引に読んでて、ドイツ着いてメンバーに会うギリギリぐらいまでヘモレイジって読むの知りませんでした(笑)。

しかし文章って書くの難しいねえ。やっぱ気分がのらないと上手く書けないなーと思い、早速HAEMORRHAGEの最新アルバム『Morgue Sweet Home』をスタート! ぶはは! なんじゃこりゃ! 全然気付かなかったけどこの1曲目のイントロ、完璧にDEAD INFECTIONの『Chapter of Accidents』の「From The Anatomical Deeps」パクりやんけ! でもHAEMORRHAGEの魅力ってそういうバリバリわかるパクりというかオマージュなのかそういうのをガガーンとやってしまうとこなんですよね。思えば1stの『Emetic Cult』もネクロマンチックのイントロからもろ"CARCASS大好き"サウンドが炸裂しまくっていかにもなパターン展開や唄いまわしがテンコ盛りでした。まあ全てがパクりなわけないですがおっさんたちが創るとこうなるって感じですね。ちなみにギターのLuismaとボーカルのFernandoは僕と同い年でもう1人のギター、Luismaの彼女でもあるAnaは少し上でたぶんもう30ちょいですね。年が一緒だから聴いてきた音楽もかなり近いからHAEMORRHAGEのやりたい事とか各曲のツボとかは結構わかる感じです。

2年ぐらい前にHAEMORRHAGEがTOTAL FUCKING DESTRUCTIONとNYCTOPHOBIC、AGATHOCLESとでGRIND OVER EUROPE 3(ちなみに2はEXHUMED、HEMDALE、NYCTOPHOBICでした)のツアーをドイツで見る事ができました。HAEMORRHAGEの連中とひさしぶりに再会もできうれしかったなあ。でもなんとなく恥ずかしくてあまり喋んなかったですね。Luismaは前より太っててAnaもちょっと老けてましたねえ。そんでもって久しぶりにライブ見たけど、残念な事がありました。ライブ中盤ぐらいで酔っぱらった客がペットボトルを投げてそれが運悪くFernando君の頭にあたってしまい怒ってステージを降りてしまいライブが終わっちゃいました。あらら。まあ演奏も凄い上手くなってたし貫禄ついてましたね。ぜひ日本のゴアフリークに観て欲しいですねえ。誰か日本呼ばないかなあ…。

彼らのオススメ音源はやっぱり衝撃的な1stと最新作の『Morgue Sweet Home』。あとsplit live tape with EXHUMEDなんかグレートです! 他にもsplit 7"なんかもいろいろでてるのでディグってみてくんさい。

by CSSO / Gorepper 5

アメリカンハードコア
が私にもたらしたものは…

by Hideki Handa(半田商会)

アメリカンハードコアというネームは過去の物となりUSハードコアといわれるが、スタイルとしてのアメリカンハードコアはきちんと認識されるであろう。鋲ジャンならUKハードコア、ネルシャツ(スケート?)ならアメリカンハードコア。この定義は80年代のものであろうが。私は80年代後期からハードコアの攻撃的な部分に影響を受けたので、当時は両方ともハードコアだし今でもそうである。はずである。

『DOLL』は私の読物として17年位になるのですがその頃から既にアメリカンハードコア(それは只、単にアメリカで活動しているからであろう)はあったし、それは小さい記事ながらも大切な情報源であった。今でも自宅にはホコリにまみれてカビ臭くなってはいるがきちんと本棚に並んでいる。高校辺りにその影響を受けてしまえばもちろんレコードは欲しくなるしライブも観てみたくなる訳で卒業後は速攻で東京に来るが、まだまだUKスタイルが全盛。最近ライブでは革ジャン人口が少ないので寂しい限りであるが当時は気合の入ったペイント、鋲の輩が沢山いた。私も真似はしてみるがどうにもそういうセンスは無いようで諦めて、でも結局はどこにも居そうな普通のお客さんで。ちょっとバンドTシャツ着ているからパンクとかハードコア好きなお客さんだった。今でもそうだし。まあ元々リスナーであるしオーディエンスだ。ステージに立った事もあるがやはり器では無いと考えさせられるその頃もあった。本物を観てしまえばそれに勝てないのは事実で、何ができるかを考えれば自宅でコツコツやるような仕事が合っていたのかも。そんなところが半田商会の原点であるかも知れない。

現在半田商会は5年程になりますが16作品のリリースに恵まれ来年も予定あり。半田商会を始める前からもちろんハードコアは聴いている訳ですが日本ならライブに行けばバンドに出会えるし音源も手に入る。外国のバンドは観る事が出来ないので小さな情報も見逃さずに雑誌やショップのコメントは大事な情報でいろんな物を聴いていました。興味のある物はお金の許す限り買って聴いていた。それでは足りずに読めない外国のファンジンのシーンリポートやレビュー。これがまた大切で、更にはサンクスリストまでチェックしだす始末でそりゃ売れている物を聴いている暇は無い訳です。今では開き直って別に聴かなくてもいいし、聴きたいものだけ聴いてりゃいいじゃんと思っています。だから有名なバンドについてはあまり知りません。何でも聴く訳ではありませんので会社の人に聴かされても知らないとしか言えない。ただ感じてそれが良ければそれでいいじゃないかと思うのです。レンタルもCDは殆ど借りた事はありません。最近はレンタルビデオ屋も殆ど行きません。欲しい物にしか興味がないと言うか、逆に凝りだすと掘り下げていきたくなります。このファンジンはファストを主に扱っている物ですがそういうのは最近あまり聴いていないかも。

只、スピード感は気にします。最近はクロスオーバー辺りが気になります。これまた古い話ですね。80年代はスラッシュメタルも全盛期ですしハードコアも凄かったですし、両者が影響受けるのもわかる訳です。最近のモダンな物はスピード感と言うよりはグルーブ感ですか? ミクスチャーの発展した物ですか? ああいうのが流行りらしいですが私は知りません。やっぱり10代後半から20代前半に受けた影響でしょうか? 横ノリは苦手です。縦ノリというより突っ込む位の方がいいですね。そういう意味においてハードコアは絶対でしょう。時々ステージからバンドのメンバーがフロアに突っ込んでくる事もあるし。最近は少ないですか? 客のノリが悪いから突っ込んで気合入れるとか、客少ないから降りてきて歌うとか。ステージで抑えきれない衝動はフロアにこぼれてくるわけですね。演奏を気にするバンドよりちょっと位下手でもバーンとくる勢いを持ったバンドの方が好きですね。感覚的ですが。やっと『FAST』に、ファンジンの主旨に、近付いてきたみたいです。

ファストというよりスケートコアに近いか第2世代のスケートブームは私をアメリカンハードコアにより近付けました。スピード感という意味においてはとても似ていますね。両方とも。こんな文章もどこかの雑誌で見た事がありますが。でも実際私はその中にいたしスケボー上手くなれませんでしたがやっていました。ネルシャツ腰に巻いてサークルピットの輪の中にいました。ピットで揉みくちゃにもなっていました。やっぱりアメリカンハードコアです。でもその頃はジャパコアというよりネオハードコアよりでした。攻撃性よりライブを楽しむ事を彼等は大事にしていたと思い

ます。そういう輪みたいな物に憧れました。

分岐点かも知れません。ハードコア多様化の。私の中では本質は同じ様に感じましたがスタイルの違いはその後の客層やハードコアという言葉の意味合いを深いもの、浅いものにかえたのではないかと今思うわけです。こむずかしい様に思うかも知れませんが私自身にも良くわかりません。価値観は人それぞれ違う物ですから一概に言えません。書いてしまいましたが。ネオハードコアはより音楽的な部分に於いて、ポップな部分に於いて世の中に受け入れられロックという意味合いを強く打ち出して行ったかも知れません。メロコアやエモ、激情の流れはここから始まったといっても過言はないでしょう。と思います。自信が無いから思います。もっと分析できる人が書けば分かり易いのでしょうが私の場合、経験が全てですのでそういう風に感じたからこんな風にしか書けません。そういう頃に私はそういうアメリカンハードコアも聴いてもいましたし。その頃『MAXIMUM ROCKNROLL』を見ていた。英語が堪能で無い私は見ると書きます。実際記事は読んでなし、読むといえばシーンリポートで怪しいバンドのチェック、レビューのハードコアの文字にチェック。ハードコアというだけで音もチェック。よくこれが失敗の元でした。今考えればアンダーグラウンドに於いて幅広く聴けた事がせめてもの救い。救われてもいないかもしれません? SxExハードコアやユースクルータイプも聴きました。シーンが確立する前は『MAXIMUMROCKNROLL』にもそれらのバンドの広告やレビューが載っていました。今はどうでしょう? ニューヨークハードコアもありました。今でも初期のバンドはオリジナリティがあり勢いがあると感じます。その流れは何年か遅れて日本にも来ましたが。オールドスクールやニュースクール等々。

UKハードコアやヨーロッパのもの、イアーエイクの初期は良く聴いていたしリリースも活発であった。今思ったのですがどちらかというとファストという意味合いが近いのはこの辺りではないかと。グラインドも然りですが。皆さんはどう考えますか? S.O.B.やNAPALM DEATH、E.N.T等もその頃活動していたし。

ライブに行けばより詳しくシーンの事が分かるだろうし、音源のリリース具合によってもシーンの活発さが良く分かる。さて次はどんな物に興味が湧くだろうか。私の経験はそれ程のものでもありません。ライブに足を運んで観てライブを感じて今に至ります。今、情報は手に入り易いです、音源も手に入り易いです。選択するのは自由です。私がこの道に踏み入れて抜けられないのは今でも心を動かす何かがあるからだと思い、それがあるから生きられると思うのです。半田商会の音源はそんな経験の生かされた個性豊かなバンドをリリースしています。

ARMENIA cocytus

ARMENIA -cocytus- CD
2nd album 1500yen
Now on sale!

Handa&Company
c/o Hideki Handa
102 Chikaraishi-So, 3-71-8 Ikebukuro,
Toshima-Ku, Tokyo 171-0014 Japan
Phone&Fax 03-3980-7563
E-mail:handacore@mwc.biglobe.ne.jp
http://www.geocities.co.jp/Hollywood-Stage/9052

RECORD REVIEWS

FAST? GRIND? CRUST? POWERVIOLENCE?

Illustration by Efu Matsumoto

ハードコア、グラインド、クラスト、ファストコア等々、根本的な思想や姿勢、音楽的スタイルから便宜上そのような括りをするケースは非常に多く、大雑把にどのようなサウンドなのか分かるので便利であるが、時として先入観を与え、バンド側が不利になるような事も多々あるのも事実。多くのファンジンで言われていることだけど、レビューというのはあくまでもライター個人の感想に過ぎず、その意見が正しいわけではないし全てではない。つまりレビューは一意見として鵜のみにせず、それぞれ自分の耳で善し悪しを判断することが大切だと思う。

本誌で取り上げているレコードやCDは、本誌ライターのお気に入りを掲載しているので、掲載もれをした重要作品もあるかもしれないが、リリースされたものを全て掲載するなんてことは100%不可能だし、日本のバンドだからといってひいきにしない。本誌のポリシーとして当然タイトル通り、基本的に速い音楽を扱い、国籍、人種、一般的に言われるジャンルは関係ないのだ。ようはいろんな意味で格好良ければいいわけだから…。

※既に売り切れているレコードもあるかもしれません。あらかじめご了承下さい。
またレーベル住所は念のためそれぞれ確認してください。

ANAL CUNT
『Very Rare Rehearsal from February 1989』CD
Shipman Records
(4-31-11 Eifuku, Suginami-ku, Tokyo 168-0064 JAPAN)

一時期解散の噂が流れていたがしっかり活動中で、今年3月には来日まで果たす。ライヴは初期の曲が中心になっているようだ。この作品においてもグラインド・ノイズとして気狂い扱いされていた極初期の音源で度胆を抜かす。リハーサル音源とはいえ、14年も前のものとは思わせない極めて先鋭なスタイルは、既存の音楽に括られることを拒み続ける故に、今聴いても凄いの一言に尽きる究極音楽。ボストン・ハードコアを通過し、判りやすいユーモアを導入したEarche時代の音楽性も悪くはないが、ANAL CUNTの魅力はこの極初期のスタイルに詰まっているといっても過言ではない。変態ぶり健在の新曲が聴きたくなる程グレイト。

BIRDFLESH
『Carnage on The Fields of Rice』7"EP
Nuclear BBQ Records(c/o George Lopez 3816 E.Dozier St., Los Angeles, CA 90063 USA)

どこまで本気なのか、イヤもしかすると全てをさらけ出した結果なのか。だとすると、100%阿呆全開で馬鹿まっしぐらなスウェーデンのポンコツ野郎共。ただし、それはあくまでもビジュアル面だけの見せ掛けであって、中身はというと極上のグラインドコアだから侮れない。突進性はTERRORIZER、ノイジーな展開はNASUM、発想面ではANAL CUNTといった印象で、随所に発狂ヴォイスやユニークなメロディを導入している点も見逃せないだろう。逆に言えば、その部分にポンコツさが潜んでいるのかも。80年代後期デスメタル風で始まる曲もあるけど、それもハマってしまうのは彼等の許容範囲が広いからというのは他ならない。

BLACK MARKET FETUS
『Murder Machines』7"EP
Rat Gut Records

ジャケットからの印象はイマイチだが、ぶっ壊れ度の極めて高いアメリカの5人組の1st音源。徹底的にヘヴィに仕上げたブルータル・サウンドは、基本的にグラインドコアのダッシュ力のあるブラストビートを用いながら、どこかクラスティーな雰囲気を醸し出しているのがポイント。しかし時折聴かせるメロディックなパートは、明らかに今どきのニュースクール・ハードコアそのもの。良く言えばSLAYER以降のスラッシュメタルがベースか。このメタリック・サウンドを用いながら、スパイキー且つ鋲ジャンなルックスというのもナイス。また内ジャケットにレイアウトされている数々のフライヤーには、興味深い対バンが多数あり。

BLACK MARKET FETUS / BODIES LAY BROKEN
split 7"EP
Discos Al Pacino(P.O.BOX 3051 Burnsville MN 55337 USA)

グラインドコア・バンドの期待の新生バンドによるスプリットで、まず前者BLACK MARKET FETUSは上記レビューにも書いたように、クラスティなルックスと、グラインドコアとメロディック・デスメタルをミックスしたようなサウンドが、妙にマッチしているグレイトな出来だ。後者BODIES LAY BROKENは、MACHENTAZOとのスプリット盤も出しているミネアポリスのグラインドコア。こちらも昔のヤクザ映画等から引用したような日本語を多様したSEと、重低音域で唸っているヴォーカル、というか声とのギャップが実にユニークだ。私的には新たなバンドが出現という意味でも大満足な1枚。

BRUJERIA
『Mextremist Hits』LP
Monster Records (Apartado de Correos 18107, 28080 Madrid, SPAIN)

あたかもライヴ活動をしているかのように出身地やメンバー構成に至るまで偽っていたのは有名な話だが、各方面への影響は計り知れない。英語以外の言語を使用し、感情込め過ぎて字余りのごとくメロディーに収まっていないヴォーカルはいつ聴いても格好良過ぎで、このバンドの特徴ともいえるほど個性として光る。覆面剥がし正体バラした途端人気は下降の一途を辿るのだが、あくまでもモダン化による音楽性の変化がマイナス要因なのだ。初期から現在に至るまで幅広く収録されたこのベスト盤は、良くも悪くもバンドとして大きな流れが判るので必須である。素晴らしい功績満載。「Matando Gueros」は何百回聴いても最高!!!

CEPHALIC CARNAGE
『Lucid Interval』CD
Ritual Records
(Ikebukuro Wakabayashi Bldg 5F 2-16-19 Mejiro Toshima-ku, Tokyo 171-0031 JAPAN)

グラインドコア・フリークにはお馴染みのはず。様々な音楽を取り入れた斬新且つ究極な音作りは、今はなきBRUTAL TRUTHやEXIT-13の次を担う新世代グラインドコア・バンドといえる。ただし、単に音を歪ませてブラストビートを導入しただけに留まらず、John ZornがプロデュースしているTZADIK周辺のフリーミュージック/フリージャズ、前衛音楽も取り入れたかのような、ある意味奇怪な内容だ。また時折EYEHATEGODのような重量級ハードコアや、CANDLEMASSを思わせる神秘的な雰囲気を醸し出すところも音楽の深さを感じさせ面白い。現在の裏プログレッシヴ・ミュージックの決定版。

COMRADES
7"EP
Skud Records (BP515, 33001 Bordeaux Cedex, FRANCE)

ブルータルな楽曲というのは、ただ単に重さを強調したり異常なまでの速さだけで成り立つモノではないと思う。もっと内から湧き出てくるエネルギーが重要であり、理屈抜きに惹き付け、聴き手を圧倒する"何か"がある。となると、このバンドにはその魅力が潜んでいる。グラインドコアを巻き込んだINFEST以降の血管ブチ切れパワフル・ハードコア・サウンドで、軽快なスピード感ではなく、あくまでも力強さを強調した点が大正解。その強引なパワーがブルータル度をアップさせているのは言うまでもない。サウンド自体に暴力的な雰囲気を感じさせる点ではSLAVE STATEを彷彿させ、最強且つ最狂なレコードといえる大推薦盤。

CONTAINER CRUSTIES FROM HELL / MIHOEN!
split 7"EP
Discos Al Pacino (P.O.BOX 3051 Burnsville MN 55337 USA)

前者CONTAINER CRUSTIES FROM HELLは、バンド名に色濃く自分達の音楽性を表現しているように思う。発狂グラインドコアを軸に、社会に対するメッセージ性を大切にしたシャウトするヴォーカルは、地獄で苦しんでいるかのごとく危機迫るサウンドとして押し寄せる。誌面には全てを表現しきれていないだろうが、彼等のメッセージをしっかりと受け止めよう。一方のMIHOEN!はボストン・ハードコアの流れにあり、OUT COLDを彷彿させるせわしないスピード感は、グラインドコアに勝るとも劣らない。ふだん、両者は違う客層を前にプレイしているのではないかと想像できるが、本誌的にはグッドな組み合わせ。

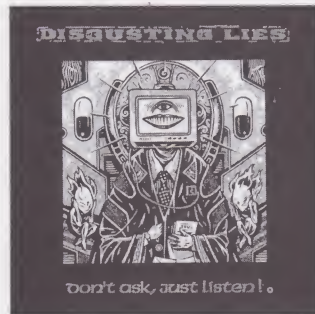
CRUCIAL SECTION
『Let's Raise Your Hands!』7"EP
Crew For Life Records
(5-4-58 5-402 Fujimi-cho, Higashimurayama, Tokyo 189-0024, JAPAN)

バンダナ・ブームの火付け役と言っても過言ではないだろう。ジャケットもナイスな単独作で、CRUCIAL SECTIONの魅力が詰まった力作。「Dark Floor of Hell」や「Encounters」で聴けるベースとギターサウンドは、所謂バンダナ・スラッシュの定番と言える音色且つメロディラインではないだろうか。もちろんそれを現在のシーンに植え付けたのは紛れもなくこのバンドであり、その筋の先駆者ならではの特権。またスケート・スラッシュはRIPCORDやHERESY等が定番とされる中で、ドラマーがライヴ時にMETALLICAの「Damage inc.」のTシャツを着用していたのを目撃したときはルーツを感じ、私は感動した。必須アイテム!!!

DEFECTOR
7"EP
Crust War
(Distributed by MCR Company:157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

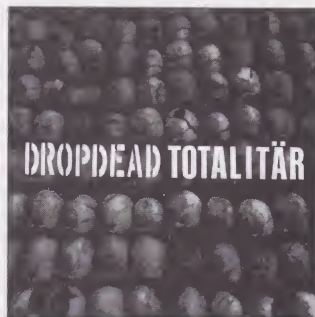
Crust Warが発行するファンジンで、即効売り切れてしまった#8に付録されていたDEFECTORのデビューEP。同誌面にもしばしば登場しているメンツが在籍。初っぱなからノイジー且つ破壊的なクラストコア・サウンドをぶっ放し、理屈抜きに格好良いのだ。クラストを知り尽くした者だからこそできる技なのだろう。いづれにしても、低価格で情報満載な素晴らしい内容のファンジンを読みながらDEFECTORのEPが聴ける、これはまさにバンド側はもちろんのこと、バックアップするCrust War側のクラストコアをこよなく愛する気持ちが表れた結果だと思う。ゲットできなかった人はがんばって探しましょう。

DISGUST
『Undermankind』CD
Mask Records
(1009 Sun Mansion Gokiso 3-1-5 Shiotsuke-Dori, Showa-ku, Nagoya 466-0022 JAPAN)

HEMDALEとのスプリット盤等をリリースしてきた名古屋のグラインドコアで、これは初の単独音源。高低音を使い分けて音に広がりを持たせつつ、ブラストビートを取り入れたクオリティの高い楽曲と演奏面において、確実に世界トップクラスのグラインドコアといえるだろう。また疾走するバックのサウンドに、ある種の語りのような言葉を乗せるところは、まさに彼等ならでは。グラインドコア・バンドとの共演に留まらず、あらゆるハードコア・バンドとのライヴも激烈ながら着実にこなし、実力がその実績に伴って表れているように思う。つまり、グラインドコアだけに終わらない箇所がいろいろな面で垣間見えるからグレイトなのだ。

DISGUSTING LIES
『Don't Ask, Just Listen!』10"EP
Agipunk
(Distributed by MCR Company:157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

クラスティーにはお馴染みの極めてダーティー路線を展開するクラストコア・バンド。MISERYやEXTINCTION OF MANKIND等の人気のあるベテラン勢と同等の位置付けをされるべきバンドで、東欧ポーランドという旧社会主義国家の中で怒りは頂点に達し、それを音に摺り替えて爆発させている。歌詞は英語ではないので残念ながら100%理解できないが、逆に言えば伝えたいメッセージが明確にあるからこそ、使い慣れた母国語でストレイトに訴えているのだと思う。もっとも歌詞の面での理解ができなくとも、怒りが込められたクラスト・サウンドをしっかりと肌で感じさえすれば、おのずとメッセージは伝わってくるはずだ。

DROPDEAD / TOTALITAR
split 7"EP
Prank(P.O.BOX 410892, San Francisco, CA 94141-0892 USA)

Tribal War Asia等のサポートにより実現した素晴らしい1996年来日以降、人気は下降気味どころか知名度も下がってしまった感のある前者DROPDEAD。気が付くとヴォーカルだったハズのBenがギターを担当し新ヴォーカリスト加入と、若干メンバーの移動アリ。6年前に感じた猛突進するファスト・サウンドは相変わらずで、私は嬉しいし本当に久しぶり。後者は言わずと知れたスウェーデンのD-Beatマスター。前者同様、変わる事のないスカンジナヴィア流のスラッシュ・スタイルに感動する。流行とは全く無縁のハードコア・バンドの硬派な由縁は、彼等のようなバンドのことを示すのだろう。真のハードコアファンに捧げる1枚。

EU'S ARSE
『1981-1985』LP
Agipunk
(Distributed by MCR Company: 157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

イタリアは日本、アメリカ、イギリスに比べると情報の少なさからシーン全体を把握するのは困難とはいえ、RAW POWERやWRETCHEDは御存じと思う。DISCHARGEの影響下にあるこのバンドも実はイタリアを語る上で重要な存在なのだ。超貴重なライヴ音源やIMPACTとのスプリット音源等を収録し、ライヴ音源に関しては録音状態に聴き苦しい箇所が少々あるけど、20年前のイタリアにおける臨場感がたっぷり詰まっていて素晴らしい。EP等に関してもなかなか接することのできない音源であるだけに、こういった形で手軽に聴けるようになったことは嬉しい。ちなみにEPの音源は劣化せずに素晴らしい激音で収録されていて最高!!!

FINAL BLOOD BATH
『Dead or Alive』7"EP
Crust War
(Distributed by MCR Company: 157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

将来的にDISCHARGEフォロワーの最高峰に間違いなく君臨するであろう。もしかすると、もうそのように認識されているかもしれない。バンド名からDISCHARGEを下地にしているのがわかるし、狂気溢れる全ての怒りを全面に出している姿勢は、終始音にも表れているからこそグレイトなのだ。更に『Why』以前の全盛期を思わせるフレーズも多数あり、現在のDISCHARGE以上にDISCHARGEな曲の連発。一音そのものまでがまさにDISCHARGEといえる充実ぶり。実に良く研究しているなぁと感心する程だ。あと『Fight Back』のジャケットに似ていると思ったのは俺だけか? 全てが完璧な必須アイテム!!!

THE FLESH
『プロフェッショナル』CD
Pump Up Rock Records
(Distributed by MCR Company: 157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

ライヴにおいて引き立つであろう適度なスピード感、誰もが親しみやすいはずのメロディとノリの良さ、全く飾ることのなく偽りのないストレイトに表現された言葉、全てが好印象。謙虚な姿勢がひしひしと伝わってくる日本語によるメッセージは、自分を含め30歳過ぎの心に打ち付け、これこそ私的には"等身大"のバンドと思えた。バンドのメンバー曰くバンドの姿勢や人間性を突き詰めた結果、というのも納得。言葉はもちろんのこと、ジャケットの太陽にも良い意味でどこか"昭和"ならではの素朴さ、懐かしさを感じさせホッとさせる。しかし、あくまでも現在を生きる者だから共感できるのだと思う。骨太な日本語ロックの醍醐味満載の好盤!!!

GASMASK / COWARD
split LP
Crust War
(Distributed by MCR Company:157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

80年代の大阪シーンで絶対に外すことのできないノイジー・ハードコアによる奇跡のスプリット盤。現在では破格の値段となり入手困難となったあのSkeleton RecordsよりリリースされたEPやソノシートだけでなく、超貴重なライヴ音源、未発表音源、両バンドによる幻のセッション音源も収録されているのだから、これはディスコグラフィ盤といえるほどベストに近い。メッセージについては、歌詞を読めば彼等が何を訴えていたのか強烈に且つストレイトに判るだろう。音楽性についてはこの域に達するとどうのこうのといったレベルではなく、存在自体が偉大なので、有り難いの一言に尽きる。約20年前とは思えぬ緊張感が漂う。

GUILLOTINE TERROR
『Battle Zone』CD
Battle Planning(4-5-3 Daimachi, Hachioji-shi, Tokyo 193-0931 JAPAN)

先頃長い沈黙を破り、強烈なライヴそして3rdアルバムにあたるこの音源で完全復活を果たした。活動歴が長い割に、このオリジナリティあるサウンドは世界的にも例がなく、自らをブルータル・デスメタリック・ハードコアと形容している通り地を這うかのごとき重低音で固め、ハードコアにおける必要不可欠な熱いメッセージを放っている。今までと同様に、世の中に潜む悪の根源に照準を合わせ、徹底的に批判と攻撃を日本語で表現する彼等の姿勢からは、常に危険と隣り合わせでありながら、生半可な気持ちでは決してできない緊張感が終始漂う。この種の音楽がサウンドだけで判断できないことを思い知らされるだろう。

HAEMORRHAGE
『Morgue Sweet Home』CD
Morbid Records

1曲目から震える程見事な曲の目白押し。えげつないジャケットや歌詞がギミックとして捉えられ、ギャグかふざけているだけの代物と思われがちなゴア・グラインドの世界を振払うかのごとくストレートに爆走するナンバーの連続。ジャケットからゴアな雰囲気を臭わせないところも意味ありげな感じがする。演奏が上手いのはもちろんのこと、とにかく気持ち良い程曲が素晴らしいのだ。演奏面ではなく曲としてのもたつく感じも全くなくなっているし、押し引きの上手い文句ナシの大傑作!!! こういった作品をリリースしてしまうから、ゴア・グラインドから目が離せないのだ。CARCASSのフォロワーの枠を完全に超えたと言っても過言ではない。

HAYMAKER
LP
Deranged Records(P.O.BOX 543 STN.P Toronto On.M5S-2T1 CANADA)

同レーベルよりリリースされた7"EPでSIDE BY SIDEのジャケットをパロったのは笑ったが、この作品においても音楽性に関して基本路線は変わらず、全世界的に大人気のハードコア・スラッシュをベースにしたモントリオールのバンド。むしろ7"EPより曲数が多いにも関わらず勢いはあるし、楽曲的にも優れていると思う。ただし、単にスピード重視だけでなくボストン・ハードコア以降の力強さを強調し、80年代の再現だけでは終わらぬ怒りに満ちた重量級激音で畳み掛けるからグレイトなのだ。恐らくカナダで現在最も勢いのあるバンドではないかと思われる。パスヘッドによるジャケットもグッドなので購買意欲をそそる好盤。

HELLNATION
『Dynamite Up Your Ass』CD
Sound Pollution
(Distributed by MCR Company: 157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

ルックスがもろパンクな新メンバーを迎えた約3年振りのアルバム。この種のバンドでは異例といえるアルバム・リリース数だ。しかし、グラインドコアやファストコアといった括りが無意味になるほど荒々しさに磨きがかかり、ハイテンションを維持し最後までハイピッチに飛ばす。超ド級の加速力は全く衰えずにHELLNATION節全開な曲満載で、音の大洪水とはまさにこういった音に対して使う言葉なんじゃないだろうか。隙間のない音の厚みも3人組とは思えない程だし、しかもこのハイスピードな展開にも関わらず、ドラムがヴォーカルを担当しているのだから恐れ入る。またこれをライヴで再現してしまうのだから、もう堪らんでしょ!!!

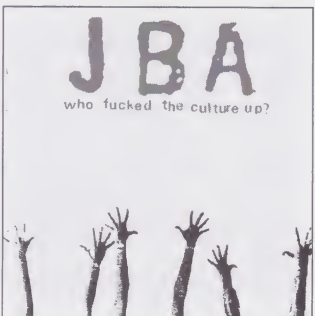
IDIOCY OF GROTESQUE / MY MINDS MINE
split 7"EP
Rot Away Records

アンダーグラウンド・グラインドコアの真髄ともいうべき、破壊的且つノイジーな日蘭強力スプリット盤。両者とも正直言って音はクリアではないため、全てのリスナーにお薦めできるかどうかは疑問だが、音がキレイであれば素晴らしいレコードなのかと言えば決してそうではない。前者札幌のIDIOCY OF GROTESQUEにしたって、予算的な部分でロウな音になっているのかもしれないが、くっきりとしない方が逆に恐怖感、地下雰囲気が強調され、バンドとしての本質的部分が見えてきて良いと思うのだ。これこそアンダーグラウンドの魅力のひとつかも。また、後者MY MINDS MINEは前者に比べストレイトなグラインドコアだ。

INFEST
『No Man's Slave』LP
Deep Six Records (P.O.BOX 6911, Burbank, CA 91510 USA)

二度とINFEST節を聴けぬと思っていたのに、2002年になって新曲が聴けるなんて本当に奇跡的で私は嬉しい!!! 1995年に録音されながらお蔵入りとなっていた幻の音源に、2000年にヴォーカルをのせた新作である。登場以降独自の路線を築いてハードコアやグラインドコアを超越し、マッチョ要素も多分に含まれた激速サウンドは地下シーンに多大な影響を及ぼしたのだが、ここでもその強烈な独自性は衰えていなかった。全編に渡って怒りをあらわにした激速ナンバーはもちろんのこと、スラッジ・ナンバーにおける彼等流のアレンジも超極悪で、あらゆる点でノックアウト間違いない。INFESTが完全復活したと捉えていいのかな?

JOHN BROWNS ARMY
『Who Fucked The Culture Up?』CD
Gloom Records (P.O.BOX 14253, Albany NY 12212 USA)

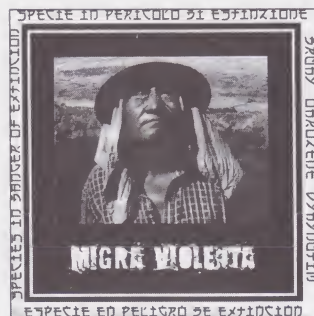
REAGAN SSとのスプリット盤もグレイトだったアルバニーのバンドで、LP盤もリリースされているようだけど、CDには今まで発表した全ての曲を追加収録していて超お得。ヴォーカルにややマッチョさを感じるけど、サウンド自体は力任せにドッシリとしながら終始テンションを下げずに突き進み、その組み合わせがニューヨーク周辺のバンドならではといえる。ただしメタリックではないのが良いのだ。80年代スラッシュ・ハードコアのリバイバルではないけど、モッシュピットが盛り上がりそうな勢いのあるスピーディーなレイジング・ナンバーに溢れ、皆に聴いてもらいたい絶品モノの出来。アメリカ東海岸ハードコアの真骨頂!!!

KNUCKLE HEAD
『業音(Gouo)』7"EP
MCR Company(157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

新体制後、初の音源となる4曲入りの自主製作CDの完売にともない、MCRより再発という形をとりながら1曲追加してのリリースの運びとなった。破壊的でありながらメロディを残したサウンドは日本ならではのハードコアの影響を感じさせ、またブラストビートの導入によりナックルヘッドの強い個性として光る。またHIS HERO IS GONEを彷彿させるエモーショナルさも感じさせグレイト。日本語による歌詞も抽象的な印象を与えながらも、"詞"というより"詩"の感覚に近く、日本語の繊細且つ美しさを活かしたセンスの良さは抜群。この美的感覚は芸術的といえる。そのメッセージを汲み取れれば、より音楽の深さを思い知るだろう。

THE LAST SURVIVORS
『Chaos is Here』7"EP
Crust War
(Distributed by MCR Company:157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

今までのCrust Warのリリースの中でも、少々違ったテイストを持つバンドではないだろうか。まずハードコアの原点ともいうべき初期UKやスウェーデンのパンクな印象を与えている。DOOM以降のクラストコアではないが、音楽シーン全体の流れとしては共通する部分が多々あるのは言うまでもない。音自体もノイジーではなく軽快に突っ走っていて、この種の音を打ち出したバンドって最近では珍しいのでは? 裏ジャケットに書かれた「We Just Another Punk Band」というコメントは、彼等の姿勢を象徴したかのようで心憎い。神奈川県大和市のバンドだが、良い意味で日本のバンドっぽさを感じないグレイトな内容。

MESRINE / IRRITATE
split 7"EP
Bucho Discos
(Distributed by Absurd Records:C.P. 302 Centro Osasco/SP 06016-970 BRAZIL)

カナダ最強のグラインドコア・バンドの前者MESRINEは、俺的には購買意欲の出る最高にクールなジャケットでグッド。内ジャケットもセンスが良いしクールだね。シリアスな歌詞や姿勢であっても、こういったユーモアを出せる余裕は必要でしょう。サウンドは今までと変わらぬ手数の多いある意味まともなグラインドコアで、この辺はさすが元DAHMERといったところか。打ち込みでも結果が良いモノであれば構わないのだ。一方の後者IRRITATEはフィンランド出身の3人組で、ジャケットはイマイチだが分厚いグラインドコアがナイス。所々スラッシュメタルを感じさせるメロディックなパートは、アクセントになっていて面白い。

MIGRA VIOLENTA / DISARM
split 7"EP
Truzzkiller

南米アルゼンチンで最強ハードコア・バンドと名高いMIGRA VIOLENTAと、イタリアのDISARMによる素晴らしいスプリット盤。前者MIGRA VIOLENTAは音楽的にはLOS CRUDOSのパワーの部分を強調したかのような、ラテン系スラッシュの魅力満載で本誌読者にはお薦め。後者DISARMは80年代イタリアン・ハードコアの影響が見え隠れしながら、重量級グラインドコア・サウンドにより即死。SODOMのジャケットをパクった内ジャケット・デザイン、レーベル面がVENOMのMantasの写真使用、日本の子供による挨拶、という意図に謎を残すけど、私的にはこのセンスと趣味は大好きだから良い。

MISERY / EXTINCTION OF MANKIND
split LP
Sin Fronteras Records (PO BOX 8004 Minneapolis, MN 55408)

米英のメタリック・クラストコアの代表格による、ありそうでなかった組み合わせ。前者MISERYは勢いだけでなく良い意味で計算された完璧な楽曲で、超重量級の戦車のごときサウンドに圧巻。どこか哀愁が漂いつつ湿り気と硬質感たっぷりのサウンドは、危険なほど中毒性が高く私的にはグレイト!!! 太く濃厚な声質も癖になる。曲数少ない分、良いところを凝縮したといえる。一方のEXTINCTION OF MANKINDはどこか初期DISCHARGEを彷彿とさせる点がナイスで、INTERNAL BLEEDINGが起用したことで有名なイラストレーターの作品を使用しているのも興味深い。個性面においてMISERYが圧勝。

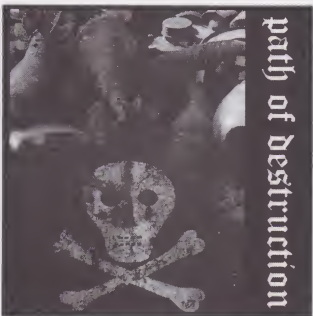
NAPALM DEATH
『Order of The Leech』CD
Feto Records (P.O.BOX 8087 Birmingham England B11 3FF UK)

実験や進化と称し、一時期路線変更をしていたのは紛れもない事実だ。良くも悪くも魅力は薄れながら今風のバンドに埋もれていって、私の中でNAPALM DEATHは完全に終わっていた。のはずだった、この作品を聴くまでは。少なくともこのアルバムでは3rd『Harmony Corruption』に近い内容に戻っている。それはデスメタルではなく、もちろんハードコア。コレを聴くと、彼等の10年間は何だったのかと思わずにはいられない。本当に実験だったのか? 単に自分達の魅力、自分達がなぜ支持されていたのか分からず、欲を出してしまったのではないか? いずれにしても我々のNAPALM DEATHは戻ってきた!!!

OUT COLD
『Will Attack If Provoked』LP
Deranged Records (P.O.BOX 543 STN.P Toronto On.M5S-2T1 CANADA)

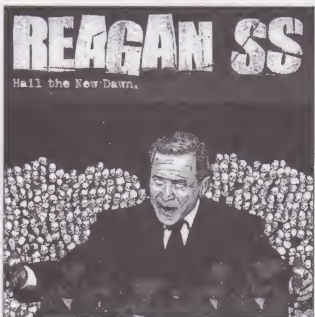
スラッシュやグラインドといった流行には全く目もくれず、相変わらずボストン・ハードコアのパワフルさを強調した結果がこの新作には備わっている。速さについてはハードコアをプレイする以上必然的に身につくものなので、あくまでもボストンのスタイルにこだわっていることが重要なのだ。プレイする側も聴く側もそれを望んでいると思う。初期はキチッとした演奏面を軸にパワフルさやスピード感を出していたので、ボストン・ハードコアでありながらどこかメタリックな印象を与えていた感もあるが、今回は荒削りな部分が増えて良い意味でパンキッシュになったところが素晴らしい。また、マニア受けする楽曲が増えた気もする。

PATH OF DESTRUCTION
7"EP
Sin Fronteras Records (P.O.BOX 8004 Minneapolis, MN 55408 USA)

ミネアポリスより新たな刺客登場! 皆が大好きなNEGATIVE APPROACHのパワーとヘヴィネスを再現し、ハードコア・シーンにおけるミネアポリスが持つ硬派なイメージをミックスしたかのようだ。所謂モッシュパートを時折取り入れているけど、全体的には適度にスピードを強調し、ユーロやラテン系ハードコアへ人気が集中する中で、力強いアメリカン・ハードコアをやってしまうところが素晴らしい。ヴォーカルはNEGATIVE APPROACHに匹敵する程狂気に満ちている、というのも決して言い過ぎじゃないと思う。あのHavocもお気に入りのようで、来年に新作をリリースする模様。次世代の大物の予感!!!

POLICE LINE
『Quality of Life』7"EP
Too Circle Records
(3-29-18 Toyotama-minami Nerima-ku, Tokyo 176-0014 JAPAN)

ドラムのPaulは現在LIMP WRISTのメンバーであり、かつてDEVOID OF FAITHにも在籍した経歴を持つ優れ者だが、そのような経歴が無意味になる程ポリティカルな要素が強く且つ強烈なハードコア・サウンドだ。ただし、NEGATIVE APPROACHを彷彿とさせる点はDEVOID OF FAITHと共通し、ニューヨークという土地柄所謂ニューヨーク・ハードコアの影響も無きにしもあらずといったところ。日本語訳を掲載しているのも日本人である私としては、バンド側のメッセージが簡単に受け止められるので高評価に値する。メロディや哀愁など一切省き、怒りに集中し表現したこれぞハードコアの名に相応しいグレイトな作品。

QUATTRO STAGIONI
7"EP
Six Two Five Thrashcore(P.O.BOX 423413 San Francisco, CA 94142-3413 USA)

ブラストビートを多用しているのでグラインドコアと括るのが無難であろうが、ファストコアの軽快感も持ち合わせているので、90年代に一大ブレイクをしたパワーヴァイオレンスの波の中で育ったバンドなのかもしれない、と考慮すると一概にグラインドコアとはいえないのがこのバンドの魅力だ。90年代中期から末期にかけて多く存在したLACK OF INTERESTタイプのマッチョ・テイストのある声質と、グラインドコア特有の高音域で暴れまわる声質との掛け合いが、新鮮に感じられるほど面白いのだ。勢いに関してはこのレビューページにおいてトップクラスで、ハチャメチャな感じが完全に私のハートをキャッチした。ドイツ期待のホープ。

REAGAN SS
『Hail The New Dawn』7"EP
Six Two Five Thrashcore(P.O.BOX 423413 San Francisco, CA 94142-3413 USA)

自分達は所謂ポリティカルなバンドではないと前号のインタビューにおいて発言していたが、ブッシュ大統領を描いたジャケットからは、現在のアメリカ政府が引き起こそうとしている戦争に対しての皮肉がたっぷりと込められ、やはりREAGAN SSはいろんな意味でポリティカルな印象を与えていると思う。最近のLAというとポップなパンクロックのイメージがあるけど、REAGAN SSを聴く限り本物のハードコアに関してのポテンシャルは極めて高いと証明されたと思う。バンド名を筆頭に、比喩した表現ではなく直球なのが良いのだ。裏ジャケットではもちろんレーガンが見つめている。

RIISTETERROR
7"EP
Terrotten Records(A/C Renan Fravero, Caixa Postal 8080, Porto Alegre, RS/ 90201-970 BRAZIL)

ほとんど反則技に近いこのプロジェクト、ズル過ぎる!!! フィンランドの生き証人RIISTETYTと、ブラジリアン・スラッシャーSICK TERRORのメンバーによって構成されていると明らかにし、バンド名まで混合しているのだから買わないわけないでしょ。モヒカン、スパイキー、バンダナを描いたジャケットは、ハードコアはひとつであるということを主張しているかのようで心憎い。D-beat要素を含み、只でさえ両者共格好良いのに、更にこれほど格好良くされてしまうと腹が立つ程最高だ。元々音楽的に共通点があるとはいえ、国境を越えたこのプロジェクトを単なるプロジェクトに終えて欲しくないと思う。マストアイテム!!!

THE RITES
『Your Last Rites』7"EP
Deadalive(P.O.BOX 97 Caldwell, NJ 07006 USA)

現在、アメリカで大人気のTEAR IT UPとDOWN IN FLAMESのメンバーからなるファスト・ハードコア。元々スプリット盤をリリースした間柄だったのであり得ない話ではなかったが、両者の力が相俟って80年代スタイルに影響を受けたスラッシュ・ソングに溢れ好印象。裏ジャケットにあるヴォーカルのジャンプ力も然ることながら、ライヴにおける激しさは誰もが認めるところであろう。7"EP45回転なのであっという間に終わってしまうけど、私的にはちょうど良い後味。ジャケットのイラストはVITAMIN Xの2nd LPでお馴染みのLA在住Ernesto Torresなので、リアル・スラッシャー必須アイテムといったところ。

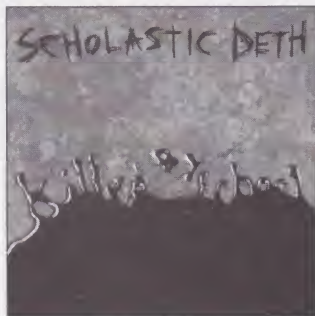
ROT
『A Long Cold Stare』LP
Tower Violence Headfakka(Danilo Posselt, Karlstrasse 51, 18055 Rostock GERMANY)

久しぶりに新曲のみでまとめられたLP。初期NAPALM DEATHに迫る破壊力抜群のグラインドコアは、腰を低く構えたノイジー且つロウなサウンドにより、アンダーグラウンドの本質を損なうことなくリスナーの耳を刺激する。様式など無縁なグラインドコアはトレンディーなヘヴィメタルの要素が全くなく、本来の持ち味である反骨精神を持ったパンクな立場でハードコアをプレイしているから格好良いのだ。10年以上活動しながら金の匂いがしないし、ここまで実力と知名度が高いグラインドコア・バンドは世界的に見てもROTが紛れもなくナンバー1だと思う。この勢いからすると、一生グラインドコアをプレイしてそうな気がする。

ROT
『Old Dirty Grindcores』CD
2+2=5 Records(Caixa Postal 1668 Sao Paulo/SP CEP 01059-970 BRAZIL)
Rotthenness Records(Caixa Postal 1197 Sao Paulo/SP CEP 01059-970 BRAZIL)

10年以上にも及ぶ長い活動歴と膨大なレコードのリリース数により、常に世界のアンダーグラウンド・シーンにおいてカリスマ視され続けている、ブラジルが世界に誇るグラインドコア・バンド。その歴史の紐を解くかのごとく、重要な音源をかき集めたコンピレーション盤だ。ロウでダーティーなグラインドコアであることは変わっていないものの、さすがに10年という歳月はいろいろな面でバンドを進化をさせたと思う。それを聴きわけるのも面白い。また彼等の場合、ポリティカルな姿勢を曲げない一貫したポリシーも高評価の要因になっていると思う。グラインドコアの魅力を堪能するには、これ以上の作品はないと思うのは私だけではないはずだ。

RUIDO DE ODIO / KONTRA ORDEN
split 7"EP
Repulsive Force Cooperative
(2-10-4-101 Sangenjaya, Setagaya-ku, Tokyo 154-0024 JAPAN)

南米最強ハードコア・バンドのレコードが日本のレーベルからリリースされるなんて感動だ。まずエクアドル出身のRUIDO DE ODIOは、ポリティカルな面を色濃く出し、重さの部分においてグラインドコアに近い鋭い攻撃性がある。ただし鬼速ではなくあくまでも基本はハードコア。一方コロンビア出身のKONTRA ORDENは、適度なスピードは保持しながら破壊的に突き進むアナーコ・ハードコア・パンクス。世界一の麻薬生産国であり、犯罪率が極めて高くて治安の悪さはピカイチなコロンビアのバンドだけに、この危機迫る状況を曲にした時の迫力は、日本のような治安の良い国では生まれることはまずありえない緊張感が終始漂う。

SCHOLASTIC DEATH
『Killed By School』7"EP
Six Two Five Thrashcore(P.O.BOX 423413 San Francisco, CA 94142-3413 USA)

WHN?やCAPITALIST CASUALTIESでお馴染みのドラマーMaxが、なんとヴォーカルを担当しているこのバンド。解散したとの噂もあるけど、とりあえず現時点での最新作である。CAPITALIST CASUALTIESの音楽性に近いバタバタした感覚、そしてDROPDEADのような強引な加速感。いづれにしても、パワーヴァイオレンスやファストコアなる言葉も無かった90年代初期の雰囲気があり、バンダナ等といった言葉とは無縁の荒々しさがあるハードコアでかなりグッド。Maxのヴォーカルはやや細い感じもするけど、常にシャウトし続けている様は格好良く、ドラマーだけでない才能の多さに驚かされた。

SHEEVAYOGA / STERBEHILFE
split 7"EP

個人的な観点から判断すると、チェコ出身のSHEEVAYOGAはジャズやフュージョン等を感じさせる箇所があり、一筋縄では行かないサウンドに即死寸前で、俺的にはジャケットからしてOK牧場なのだ。ドイツのSTERBEHILFEは粉々になったノイズの粒子を再度固まりにして、はち切れんばかりの破壊的なサウンドで炸裂させ、前者同様一概にグラインドコアと括れないほど音楽性の幅が広く、面白さでは全く引けを取らない。OUTOの名曲をカヴァーしているけど、超高速処理し気付かないほど一気に飛ばす。A面とB面で回転数が異なる変則盤。既存のスタイルに捕われずに、しっかりと形にしてしまっているというのは格好良すぎ。

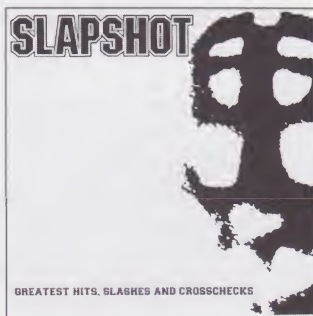
SIN DIOS / INTOLERANCE
split 7"EP

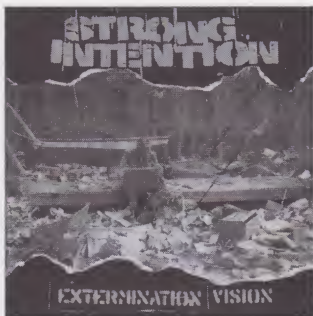
ハードコア・バンドである以上、暴力や戦争に対する批判や行動はつきものである。ただし皮肉にも、肝心な音楽そのものがそれらの言葉によって良くも悪くも掻き消されている場合が多いように思う。両者ともに楽曲能力、演奏能力がハイレベルにも関わらず、一部の地下シーンで評価されているのみだ。もし音楽面が高く評価されればファンの幅も広がり、バンド側にとっても自分達のメッセージを多くの人に伝えるという意味で成功できるはずだ。しかしこの種のバンドに対する偏見は少なからずあるように思う、残念なことだが。私的には両者共にもっと評価されるべきバンドだと感じている。2002年に入手したレコードの中でベスト5に入るグレイトな作品!!!

SKINLESS
7"EP
Hater Of God(P.O.BOX 666 Troy, New York 12181-666 USA)

数あるデスメタルの中で、ライヴの激しさに関しては折り紙付きのSKINLESS。Relapseからリリースされようが、アンダーグラウンド気質そのままに変わる事のない音楽スタイルや姿勢に、改めて惚れなおした人も多いと思う。内容は次のアルバム用にレコーディングされたデモトラックにも関わらず、実にしっかりとした出来映えなので、ファンならずともSKINLESSを知るにはもってこいの作品。定番のニューヨーク・スタイルからまた一歩抜け出し、荒々しさが目立つ感じも素晴らしい。もちろん基本は変わらずブルータル路線まっしぐら。初期の曲を大胆にアレンジした曲も面白い。しかしトロイという町の郵便番号はナイスです。

SLAPSHOT
『Greatest Hits, Slashes and Crosschecks』CD
Kingfisher Records

現在に至るまでの代表曲を収録したベスト盤。また1曲目と2曲目が新曲というのが嬉しいではないか。全曲通して聴くと中期のOi的なノリも悪いわけではないが、彼等の魅力は初期に集中すると思うのは私だけであろうか。「Chip on My Shoulder」はいつ聴いても格好良い。しかし問題はこのCDがアメリカはもちろんのこと、日本でも流通されていないということ。(ただしヨーロッパ全域ではそれなりに流通されている)この件で怒ったメンバーはジャケットの白黒を反転させるなどのデザイン変更し、地元ボストンのBridge Nineから再発。ただし内容は同じ。私に言わせれば、Kingfisherから出す方も悪い。

STRONG INTENTION
『Extermination Vision』CD
Coaltion(Newtonstraat 212, 2562 KW Den Haag, THE NETHERLANDS)

新世代スラッシュの大本命による待望の新作。基本路線はあらゆる激速サウンドを吸収したINFEST直系爆走スラッシュ・ハードコアであり、終始身震いする程理想系に近い格好良さは、スプリット盤を含む過去4作品の中で1番だと思う。1曲目と8曲目にCOMIN CORRECTのRick Ta Lifeが参加し、彼の良さが十分に引き出されているだけでなく、曲的にも引き締まってグレイト。Rickのシンガーとしての個性と実力が光っているのは言うまでもない。Coaltionからリリースというのも気になる点で、現在スラッシュ・ハードコアが世界的に人気はあるけど、その中心がヨーロッパに移行しているひとつの表れのように感じられ興味深い。

SU19B
7"EP
Blurred Records(482-1 Naka, Kambara, Ihara, Shizuoka 421-3213 JAPAN)

アメリカ米軍キャンプがある神奈川県座間市からの刺客。ドゥーミィー且つスラッジな暗黒世界からスタートし、ジャケットで表現された無惨に破壊され廃虚化した高層建築物のように、死を連想させるただならぬ冷たい空気感が恐ろしくも全編に渡って漂う。一言で言えばハードコアなのだが、その絶望的で重苦しい感覚は今はなきGRIFFに近いと感じさせ、幸せを感じることのできない悲観的な印象を受けるのだが、それが原動力になって聴き手に恐怖感を抱かせてしまうほど迫力あるサウンドになっている。ゆえに強力なメッセージを生んでいると感じた。他のハードコア・バンドとは違った視点から物事を捉えた結果なのかもしれない。

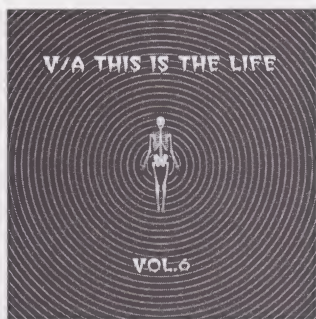
V.A.
『Fuerzas Unidas』Tape

現役メキシカン・バンドMARTHA 26、TOXIC SHOCK、SUBLEVACTION、INSURRECCIONを収録したグレイト・コンピレーション。WWEのルチャ・ドールであるレイ・ミステリオが言葉では言い表わすことができない程格好良いオーラがあるのと同じように、今どきの軟派なラップメタル調であってもなぜか格好良く聴こえてしまうメキシコのバンドは凄いとしか言いようがない。HIS HERO IS GONEのようなタイプにしろ、ニューヨーク・スタイルにしろ共通するオーラを発しているのは、長い年月をかけてメキシコに対する俺の意識がそうさせた。世界にはたくさんのグレイトなバンドがいると再認識。とりあえず俺としては今メキシコが熱い。

V.A.
『H.S.S.R.R. 3way Split CD』CD
MCR Company(157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

今年9月にHELLNATIONが、日本が誇るSLIGHT SLAPPERSとREAL REGGAEとジャパン・ツアーを行なったのは記憶に新しいと思う。その全激速ファンにとって必見だったツアーを記念してリリースされたのがこのCD。前号で告知した通り、リリースしたMCR Companyには残念ながらストックは既に無くソールドアウト。臨場感たっぷりなライヴ感のある勢い任せの演奏は、実にナイスだしさすがといえる。これは数々のライヴを百戦錬磨行なってきたバンドだからこそ。各バンド共、限られた時間内に自らの魅力を驚く程引き出している素晴らしい内容なだけに、入手していない人はがんばって探しましょう。

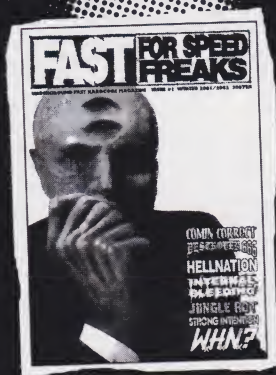
V.A.
『Mie City Hardcore vol.2』7"EP
MCR Company(157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

大好評の都市シリーズ久しぶりのリリースは三重編。前回リリースされた8年前と比べてシーンが良い意味で変わったと感じさせた。つまりライヴと音源において常に素晴らしいバンドが生まれ、育って、活躍しているということ。今回初音源となるCONTRAST ATTITUDEとALIVE、そして1st12インチが大好評だったDECEIVING SOCIETYにしても前回の頃は存在しなかったバンドであり、にも関わらずその勢いは今更何の説明も要らない程。ノイズ性のあるギターを中心に迫り来るクラストコアに狂喜する。中でもやはりDECEIVING SOCIETYの迫力は、他のバンドより群を抜いて壮絶な印象を与えていてグレイトだ。

V.A.
『This is The Life vol.6』CD
MCR Company(157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

地下シーンに潜み、独自の見解を持って自らを主張するバンドが集結した大好評シリーズ第6弾。各バンドに共通する核があるからこそ、所謂ジャンルの壁を越えることを可能にし、あらゆる音楽スタイルが刺激し合っている。ここに宿る魂を汲み取ることが重要で、新たな力を知ることによってシーンの活性化につながり、結果多くの人に意見が伝わっていくのだ。つまりハードコアの本来あるべき姿は腕力やファッションが重要ではないということ。大した意味を持たないコンピレーションが多い中で、新たな力を持ったバンドを取り上げたこうしたCDは断固として支持する。基本的には現在進行形が重要であって、過去にのみこだわりたくないのだ。

V.A.
『Tomorrow will be Worse vol.3』CD
Sound Pollution
(Distributed by MCR Company:157 Kamiagu Maizuru, Kyoto 624-0913 JAPAN)

元々ポップセンスはあったので自然な成り行きかもしれんが、初っぱなからF.O.Dによるパフィーちゃんのカヴァーが最高です(笑)。SNUFFを連想してしまったのは私だけか? IDOL PUNCHもどこかポップ感があるのが人気の秘訣。定評あるライヴに裏付けられた完璧なまでの楽曲に脱帽なVIVISICKの「Border Line」は格好良すぎです。名前がナイスなBRODY'S MILITIA、ゴーストバスターズをパロったジャケがナイスなSTRUCK。最後は祝復活組のTHE FARTZ。適度なノイズとスピード感はベテラン勢ならではの説得力であり、アクの強いヴォーカルは80年代C級臭くてグッド!!!

BACK NUMBER

初版発行2001年12月1日 / 第2版発行2002年4月1日 ¥300

インタビュー
COMIN CORRECT / HELLNATION / INTERNAL BLEEDING
JUNGLE ROT / STRONG INTENTION / WHAT HAPPENS NEXT?

特集（ライヴ・リポート）
DESTROYER 666

SOLD OUT 在庫切れのため、店頭販売分のみです。

初版発行2002年9月1日 / 第2版発行2002年11月1日 ¥350

インタビュー
GATE / GORE BEYOND NECROPSY / HOLDING ON / KRIGSHOT
REAGAN SS / SENSELESS APOCALYPSE / VITAMIN X

特集
SLAP A HAM RECORDS

NOW ON SALE

取扱いショップ・ディストリビューター・レーベル

ALLMAN 03-3360-5166（東京）・ANSWER 052-241-0667（名古屋）・BASE 03-3318-6145（東京）・BOY 03-3315-2682（東京）・DISK UNION（パンク取扱各店舗）
IGNITION RECORDS 06-4802-3621（大阪）・NAT RECORDS大阪店 06-6212-2018（大阪）・NAT RECORDS東京店 03-5338-6846（東京）・OVAL 0258-31-3235（新潟）
STRAIGHT UP RECORDS 011-219-0097（札幌）・TIME BOMB 06-6213-5079（大阪）・DONMAI RECORDS・HANDA & COMPANY・UNDERGROUND WARDER PRODUCTIONS

※入手御希望の方は上記ショップ、ディストリビューター、レーベルにお問い合せください。次号は2003年春(4～5月)発行予定です。お楽しみに!!! またネタ、広告、ライター、本誌を取扱ってくれるショップ・ディストリビューター・レーベルも募集中です。

FAST FOR SPEED FREAKS

UNDERGROUND FAST HARDCORE MAGAZINE

ISSUE #3

350YEN

MISERY

FUCK ON THE BEACH

MUKEKA DI RATO

HAEMORRHAGE

MISCONDUCT

AVULSION

FOR SPEED FREAKS

UNDERGROUND FAST HARDCORE MAGAZINE

350YEN

KA DI RATO

AVULSION

FAST FOR SPEED FREAKS #3

F-FACTORY

MISERY

MUKEKA DI RATO

AVULSION

HAEMORRHAGE

MISCONDUCT